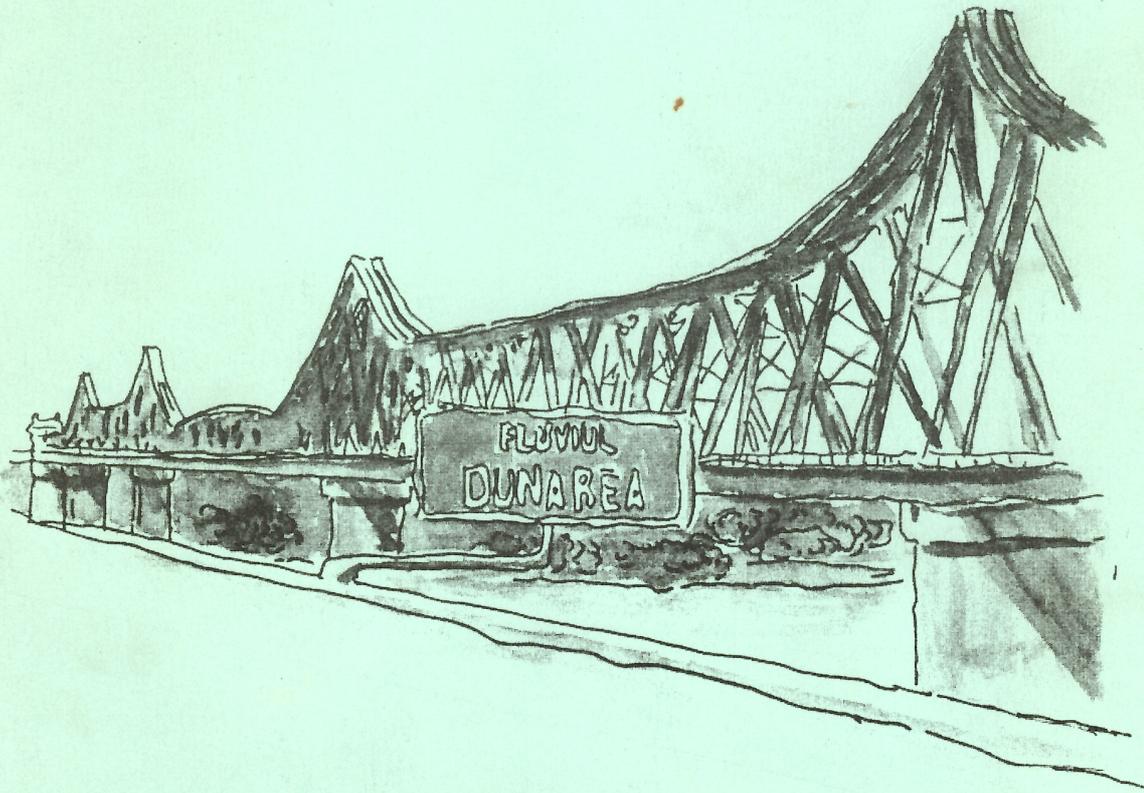


皆川 勝

武蔵工業大学土木工学科 橋梁研究室・鋼構造研究室
同窓会誌 NO. 5

武蔵橋友会誌

西脇威夫先生定年御退職特別記念号



平成9年7月
武蔵橋友会

◆グラビア◆

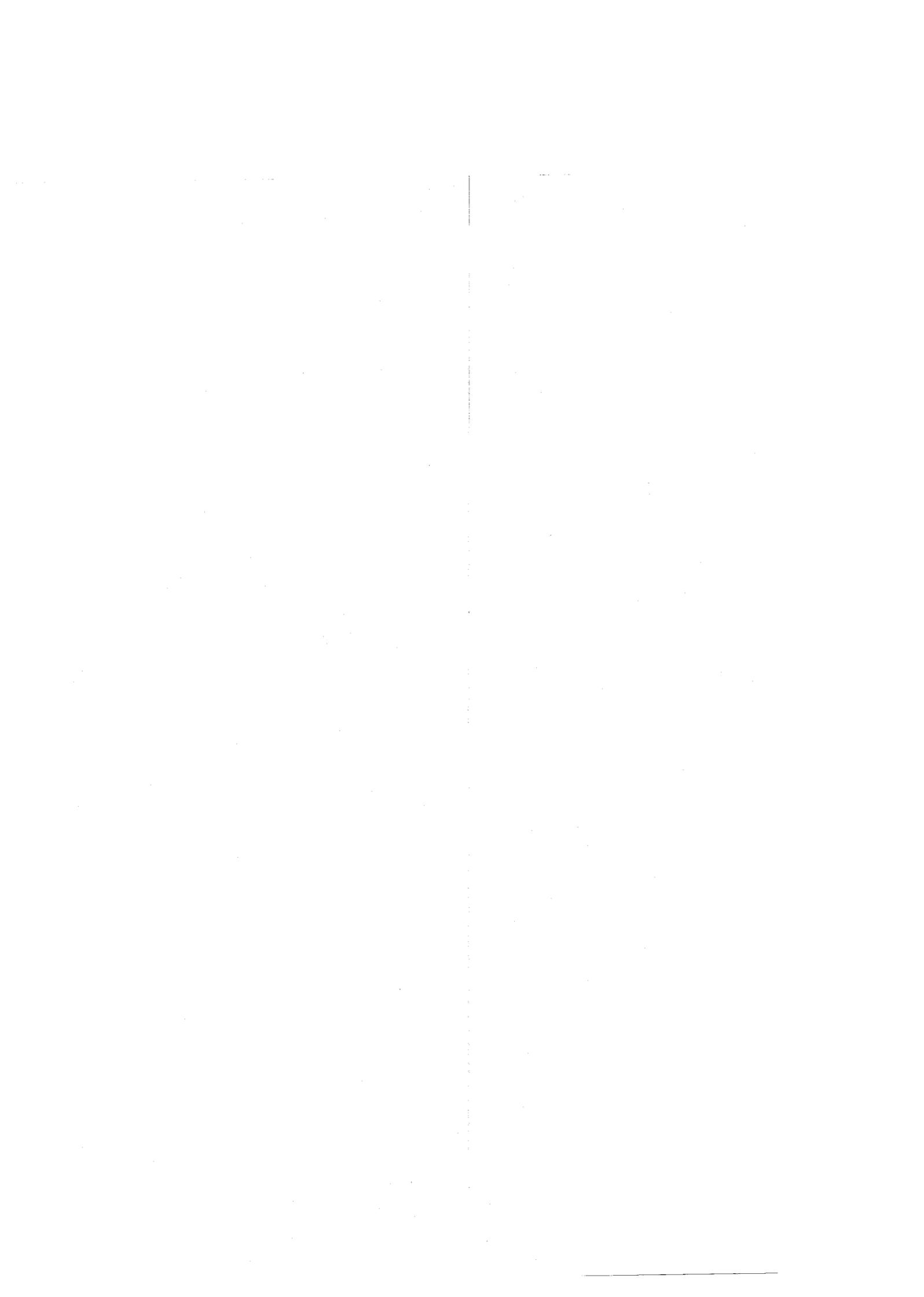
西脇威夫先生御退職記念 CD-ROM 橋梁写真集（制作中）より



Westminster 橋 (イギリス)



Holbein 橋 (ドイツ Frankfurt)



97年度 橋友会誌目次

ページ

◆グラビア◆

◆目次◆

- ・ I know it. It's located in Tamazutsumi ,Japan. / 西脇威夫 1
- ・ 西脇先生ありがとうございました / 増田陳紀 20

◆会員だより◆

<特集> 西脇先生の御退職に向けたお言葉

- ・ 古き思い,そして今思うこと / 興石 繁 24
- ・ 若き日の西脇先生の思い出 / 倉西 茂 26
- ・ 橋友会会員の方々から一言 29

- ・ 西脇威夫先生定年御退職記念 CD-ROM 橋梁写真集 36

◆会合報告◆

- ・ 第4回武蔵橋友会総会 39

◆鋼構造ニュース◆

- ・ 助手として白旗さんが就任
鋼構造研究室就任に向けてのあいさつ / 白旗弘実 39
- ・ チリからの留学生 41
- ・ 鋼構造研究室のホームページ 43
- ・ 過去数年間の修士論文,卒業論文の紹介 46
- ・ 渡貴司君が土木学会学術年次講演会で優秀講演者賞受賞 47
- ・ 江田島合宿,現場見学会について 49
- ・ 富士山登頂達成 52

◆お知らせ◆

- ・ 事務局からのおしらせ 55
- ・ バックナンバーのお知らせ 56

◆武蔵橋友会会則◆

- ・ 武蔵橋友会会則の変更案 58
武蔵橋友会会則 (案)
役員候補者 (案)

武蔵橋友会会員名簿

武蔵工業大学 校歌

編集後記



I know it.
It's located in Tamazutsumi, Japan

西脇 威夫

1. まえがき

奇妙な表題ですが、これはアフリカかヨーロッパかあるいは南米のとある町での、一人の日本人技師とその国の政府要人あるいはエンジニアとの会話の一部です。二人は仕事の打ち合わせが終わり、よもやま話から話題がたまたま卒業した大学になりました。その日本人技師が、“I graduated from Musashi Institute of Technology.”と話す時相手は満面に畏敬の念を漲らせ、表題の言葉を彼に返ししながら強い握手を求めてきたのです。50年後に世界の至る所でこのようなことが起こることを私は期待しています。百歩譲って、日本の田舎のおばさんが本学を知らなくてもよい。小さな建設業やコンサルタントの社長が知らなくてもよい。世界中の国々の政府要人や上級技術者は、等しく本学の卒業生に畏敬の念をもち、本学に憧れをもっていて欲しいのです。しかしこんな状況が起こりうるのでしょうか？私は起こりうることを確信しています。もちろん来年あるいは10年後に、そんな事が起こるとは絶対にありえないとも固く確信しています。起こるのは50年後のことです。そのころには私はお墓の中にいます。私どころか、50年後とは、今年入学した学生の一人が本学の教員に採用され、その人が多分定年退職する頃なのです。

そんな馬鹿馬鹿しい話にはつきあってはおれないとおっしゃる方は、このさきはお読みにならないで下さい。時間の無駄使いになりますから。武蔵工業大学白書のように現実を見つめ、将来を真面目に展望しているものとは全く違い、年寄り教授の“タワゴト”なのです。

2. やはり“玉”をみがきたい

私達の携わっている業務の一つに学生の教育があります。私達は私達の限られた能力と時間の中でそれをも含むいくつかの業務を日常こなしているのですが、このときに私達がまず念頭に置くことのひとつに効率よく物事を処理してゆくということがあります。即ち仕事の効率化あるいは仕事に使うエネルギーのオプティミゼーションということでしょう。このような前提をたてて教育業務をみると我々の教育業務に対するあり方は“教育業務に投入したエネルギーにたいして最大の効果をうること”でありましょう。古くから教育あるいは自己研鑽にたいして“玉を磨く”という言葉が引き合いに出されます。この言葉はしっかり考えておくべき

ことと思います。私のように大した能力のない者はなんとしてでも教育成果を挙げるという観点から自分勝手といわれても“石”より“玉”を磨きたいのです。

ある私立大学の学長のお話によりますと、偏差値が 50 以下の学生達は殆ど自己管理能力を持っていないとのこと。限られた能力しか持ち合わせていない私は自己管理能力のある学生を相手にして私の持っているものを役立てたいと思っています。自己管理能力のない学生達に自己管理能力を与えることも重要な仕事とは思いますが、私が出すような事に限られた能力を使い果たすことが、橋梁工学を教えることより重要であるという根拠は、私には見つけにくいのです。そして本学がそのような教育をする大学になるべきであるという理由も私には同様に見つけにくいのです。

私たち私立大学は決して社会福祉事業に従事しているわけではありません。大学として最大の成果をあげなければならないのです。一方国立大学には、日本の学術水準をあげる義務が課せられています。大学教育を受けるのに不十分な学力しか持ち合わせていない若者が大学教育を受けたいと希望しているのならば、その若者達に大学教育を受けられるように配慮すべき義務が与えられていると思います。国の費用は日本の教育水準を高める高めるためにも使われるべきであると思うからです。国立大学あるいは公立大学は国あるいは地方自治体それぞれの教育水準を向上させる義務を納税者に負っています。もし補習教育がそれらの大学で必要ならば補習教育をおこなわなければならないと思います。現在多くの国立大学ではなどで補習教育がおこなわれていますが、これは妥当なことだと思います。私どもは、私達が学則に掲げている高邁な理念に向かって邁進すべきであります。屁理屈ではありませんが、受験生あるいは本学学生とは我々は学則に基づいた教育契約を結んでいるのです。補習教育をする契約は結んでいません。私達は大学教育に精を出すべきなのです。

3. “玉”と“石”を混ぜなければ大学は成り立たないのか？

ここで、話題を変えて今はやりの言葉である“教育の多様化”ということを考えてみたいと思います。この言葉は“戦後の大学の民主化によって学生数も増加し学生も多種多様となってきたので、大学も多様化しなければならない”とか、“色々な価値観が共存すべきであり、それに対応する多様化した教育が求められる”などなど“多様化”はまことに広くそして色々な表現に使用され、極めて便利に使うことが出来、加えてそれを使うと言っていることが極めて進歩的であり、時代に即応しているように聞こえるのです。また先ほど例にあげた言葉は文部省や教育評論家達が口にしたり、マスコミにもよく見聞きできる表現です。このような言葉を口にするといかにも自分も時代に即した教育に関連していることを言ってい

るかのような気持ちになって、なんとはなしに立派な教育者になっような気がして、いい気分になるのではないのでしょうか。そして教育に深く関係していない人達を煙にまくのにはまことに好都合な言葉だと思っています。

さて 1945 年の敗戦によって教育制度が大幅に変革され、教育は大衆化されてきました。最近では大学への進学予備軍ともいべき 18 才人口は 200 万人近くともいわれています。そして 18 年後には、それは 118 万人以下になることも決まってしまうました。臨時定員増を実施した頃の 18 才人口の半分近くになるのです。ほとんど単一人種から成り立つ日本人であってもそれだけ集まれば色々の性格の人がその中に含まれてくることは当然のことで、大学への進学希望者は間違いなく多様化していると断定してもたいした誤りではないと思います。戦前でもこれだけ多勢の若者を集まればそれは間違いなく色々な性格や価値観をもっている人たちの集まりになっていたに相違ありません。兵役義務によって集められた人たちが色々な人間像を備えた人たちであったことから理解できます。当時日本陸軍の初年兵の数がどのくらいであったかについては、当時の記録を見れば分かることですが、正確な数値はいま此处での話にそれほど重要ではないと思います。今 200 万人の若者が多様化したといわれていますが、昔でも 200 万人集めれば極めて多様な人々の集まりになったと思います。今の若者が多様化したのではなくて大学へ進学する学生数が大きくなったので進学希望者が色々な人間像をもつ人の集まりになったにすぎないと思います。200 万人の若者は今も昔も多様な人たちの集まりであるのではないのでしょうか。今、大学進学者が多様化したとみるのは彼らの数のちがいによるものではなくろうかと私は言いたいのです。今でも昔でもあるテーマを示して 1000 人を集めれば、そのグループのサンプル相互には大して大きな相違は無く、必ずしも多様化しているグループとは言い難いのではないかと思います。

私の言いたいことによやく到着しました。武蔵工業大学に入学したい学生 1000 人の集まりは目標が明瞭な人たちの集まりのはずですから多様な人たちの集まりではないのです。大学入学定員 69 万人（臨時定員増を含む）が向く方向を 360 度としますと武蔵工業大学進学という目標をもっている 1000 人の向く方向はわずか 31 分であり多様な方向を向いてはいないのです。我々が学生を集めるとき多様なと言う意識をもって学生を集めようと努力する必要はないのです。そうすると却って武蔵工業大学で学習するのに不適な人を集めてしまう恐れがありそうです。1000 人の若者の中に、例えばよくないとは思いますが、例えば青物屋をやりたいとか、銀行員になりたいとか、人材派遣業をやりたいとか、不幸にして日本が自衛権を行使しなければならなくなった時、命を捨てて日本の人々を外敵から守る人になろうとしている人は巨視的にはいないと思いますし、いたとしてもその人達の希望する教育を本学は十分行なうことは出来ないと思います。そしてそのような若者達が入学

すれば、彼等は本学に失望し、駄目な大学というレッテルを貼り付けて去って行くことでしょう。

文部省や教育評論家は200万人を対象に発言していますから大学は多様化した若者に対応しなければならないと言います。それはそれで間違っていないと思います。大きな総合大学あるいは日本の大学全体のことを言っているのですから、まさにそのとおりです。また数多くの学部を設置しているマンモス大学の学長はそのように考えていなければならないと思います。しかし、1000人を募集する大学にして見ればわずかに31分に分布して極めて多様化していないグループの事を考えればよいのであって360度を向いた集め方をすることはとんでもない集め方なのだと思うべきを得ないのです。360度の広がりから集めると武蔵工業大学にして見れば“石”も集めてしまう可能性を含んでいます。私たちは意識して360度にばらついている人間を集めるのではなく、31分にしかばらついていない人達を求めべきだと思います。

電車の中で後姿を見ただけで武蔵工業大学の学生であることが分かるほど個性的な学生を集めたらよいのでしょうか。尾山台駅に降り立ったその時にただちに武蔵工業大学を意識できる特殊なあるいは個性的な学生を集めたらよいのでしょうか。言い換えれば、50年後のアクティブな武蔵工業大学像を追い求める1000人を集めても現在のさらには未来の社会の要求に応えうる立派な大学として存立できるのではないのでしょうか。

現在、武蔵工業大学が採用している入試制度は受験生の多様化に対応しているいろいろな学生をかき集めようとしているように見えます。ですから“石”も入ってきて高校の補習教育を行わざるを得なくなってしまうのではないのでしょうか。そして補習教育をしても“石”は“石”です。文部大臣やジャーナリストのような人達の口にする一般論ではなく、毎年1000人を教育する本学としては、大学では大学らしい教育を行えばよいのであり、高校の補習をしなければ大学が成り立たないと考えるのは誤りだと思います。武蔵工業大学はまさに武蔵工業大学であり他のどの大学とも違っており、武蔵工業大学らしくなければならぬし、多様化した他の大学とは違っていなければならないのです。武蔵工業大学という名称が重要なのではなく、武蔵工業大学としての個性をはっきりと持つことが何よりも重要であり、それをはっきり持たなければならないのです。武蔵工業大学では31分のにみ分散している武蔵工業大学としての“玉”のみを集めて立派な現代社会の要望に応えうる大学として成り立たなければならないし、それは必ず可能だと思います。

4. “玉”を集める方法

最近、武蔵工業大学を受験する学生のうちのかなりの数の学生は高校や予備校の進学指導を担当している先生のご意見に支配されて受験しているのではないのでしょうか。そうだとするとその先生方が、“石”に本学への進学を薦めたならば、それは適切な指導者ではなく、“玉”を選んで本学への進学をおすすめになることが適切な進学指導とお考え下さればよいのです。そのためには何をすれば良いか。答えは簡単です。先生方が本学へは“玉”を送らなくては進学指導にはならないと自覚させれば良いのです。そして、このような状況をどうして作れるか。これは我々教員の仕事であり、本学の現状に照らしてみると、多分、極めて厳しく辛い仕事を永年に亘り続けなければならないと思います。最悪の場合には給与や研究費の削減も考えておかなければならないと思います。従ってそのような厳しく辛い仕事はしたくないと先生方がお思いになるのでしたら今のような“温泉ムード”（いま本学は決して温泉ムードに浸ってはいないというご意見もあるとは思いますが）を楽しみながら“自然死”を静かにお待ち下さい。私がいうところの厳しく辛いことに若干の関心がお有りの先生はもう少しお付き合い下さい。

4-1 30年計画 その1

—卒業認定学生数—

先ほど申し上げた高校から“玉”を選んで頂けるような状況に到達するのに必要な年月は多分30年かあるいはそれ以上と思います。従って40才の方は定年を70才と仮定しても、定年退職まで厳しく辛いときが続くのです。“フワフワ”した気持ちで手をつける事では決してないことを銘記すべきです。

覚悟がいたらまずは反省です。補習教育をしていること、採用が皆無ではない会社から不採用を通告されること、国家公務員1級職試験に殆ど合格しないこと、さらには“貴学では大学として教育しておくべき基本的なことを教育しているとは思えない”というメッセージが採用試験に不合格であった学生のあとを追いかけてくることなど。それらはごく限られた例だとおっしゃらないで下さい。このような学生でも今では全員卒業していくのです。そして彼らが武蔵工業大学の卒業生という看板を世界に“ヒラヒラ”させてくれるのです。

他流試合をすれば“一刀両断”のもとに切り捨てられる学生を、本学ではこんな程度でまあ良かろうと卒業させているのです。そして少しずつ学生の質が下がっているにもかかわらず何とはなしに同じように卒業させているのです。私は本学の最も充実していた時期は昭和三十年代の終わり頃か四十年代の中頃までと

ますが、そのころでしたらとても卒業できないような学生でも今では卒業していくのです。当時土木工学科では“鋼トラス橋の設計”も必修科目でした。私は、それを必修科目として学習していた経験から、これは学生には相当過酷な科目であると思っていましたが、当時の学生諸君は表向きには平然と履修してその提出直後に行われた国家公務員上級職試験にも数名の学生が合格していたものでした。最近の学生は“鋼トラス橋の設計”に必要な努力量の1/3にもならない“鋼プレートガーダー橋の設計”ですら厳しすぎると言い、それがあから国家公務員1級職の試験に合格しないのだと言います。勿論設計製図が学生の程度を完全に表しているとは思いませんが、だからといってそれを廃止しても国家公務員1級職に学生がその当時のように合格するとはとても思いませんし、事実はそのことを示してきました。

そこで、まず30年をかけてその頃にまで戻すことです。向上には低落した期間の2倍の時間と4倍の努力が最小限必要であると思います。

まず最初にするのは、無条件に毎年4%ずつ卒業させる学生数を減らして行くことです。初年度は卒業学生4%を不合格、次年度には卒業対象学生の8%、更にその次には12%（この辺が本学の現状に近いと思います。）として行くのです。かつての武蔵工業大学では卒業させなかった学生を卒業させているからです。これを続けて10年たつとその年に卒業させる学生数は卒業対象学生の60%になります。その結果入学生数に制限を加えなければならなくなる事でしょう。これは直ちに給与や研究費の削減をもたらすと覚悟しておいたほうが無難と思います。勿論、本学の栄光の再現のため、大学管理経営者は、いろいろな配慮・施策をおこない、研究・教育活動のための予算を安易に削減するべきではないのですが、ここでは取りあえず私達のみで成果を上げる覚悟をしてみましょう。この影響を少しでもへらすためには学生の在学期間を8年間から例えば6年間に繰り下げることが望ましいと思っています。8年間はあまりにも永過ぎます。やむをえない事情がある学生は、6年間で退学させ、改めて編入学の手続きをとらせ再入学を認めることとしておきます。しかし退学の理由と再入学後の見通しは厳しく審査します。そして学費はその年度入学とします。入学時の大学と学生との間の契約という概念があるようですから、入学時の契約に相当する学則をなるべく早く改訂すべきでありましょう。

4-2 30年計画 その2

—授業科目の合格率—

先ほど申し上げた本学の現状は教育成果の評価が適切ではないことが一因だと思っています。すなわち評価が甘いのです。他流試合ならば当然斬られているはずなの

に本学では斬られず、それなりに生きているのです。そこで他流試合と同程度の評価をする事が必要です。現状が現状だけに一挙にそこへ程度を上げることはよくありません。過激に事を進めないほうがよいでしょう。“その1”では毎年4%という数を一例として提案しましたのもそれを考えてのことです。

いま申し上げていることは先生方がご担当になっている授業科目の事です。10分遅れて講義を始め、学生が講義を聞いていようがまいが、10分早く講義を終える。そして自分が書いた本を教科書に指定しその索引をみれば容易に答案が書ける問題を出し、教科書が引き写してあれば合格とする。あるいは名前が書いてあれば30点、なにかそれらしいことが2、3行書いてあれば30点で合格といった馬鹿馬鹿しいことが笑い話になりましたが、勿論そんなことが本学内に存在するとは全く思っていません。しかし、これならば他流試合をしても大丈夫とか59点だからこの学生は不合格（不合格にしようとしている科目は必修科目で、それを不合格にすると、その1科目のために卒業が1年延期される場合もあります。）、60点だから他流試合でも何とか合格になるはずという自信を先生方ははっきりとお持ちでしょうか。だらしがない事ですが定年退職を目前にしても私には全くありません。卒業が1年延びることはその学生の将来を思うと好ましいことではないから教育的配慮をしなければいけないかと、1科目で卒業が延びるのは可哀想だからという理由が本当に本学の教育のためにあるいは日本の教育の将来に正しい判断を下していることになっているのでしょうか。日本の科学技術教育のために学生個人は無視されてもよいと考えているわけではなく、そのような教員の考え方が本当の教育的配慮なのかと迷っているのです。そして皆さんに申し上げることは失礼極まりない事ですが、心の奥底には“本学だからまあこの程度でよいだろう”というお気持ちが僅かにお有りではございませんか。神ならぬ身としては仕方がないことと思えます。しかし“本学だから”というスケールが不変のものとして確立していらっしゃいますか？また確立しておられるとしたならばその客観性をどのようにご立証なさいますか？かく申し上げる私は、それを全く確立できずに、不惑の年をとくに迎えながらなお迷いつづけて定年を迎えようとしているのです。40年以上に亘って悩み続け、迷い続け、模索を続けて答えを見つけることも出来ず卑怯にも“ステゼリフ”を此処に残そうとしているのです。

土木工学科では何年前かに、5年間にそれぞれの科目の合格率を無条件に50%まで引き下げるといふ評価法を実行したことがあります。細部ではいくつか問題点はありましたが私は今でもとんでもないことをしたとは思っていません。一部の卒業生は、卒業後に高くそれを評価していますし、本学再生のためにはそれを強化すべきであるという意見も聞こえています。再考し、検討しなおしてより良い方向に向けるべきことと思っています。

30年計画その2としては次のことを提案します。5年間を1スパンとし合格率を殆ど50%まで引き下げること。そして5年毎あるいは3年毎の見直しは絶対不可欠です。学生の意識の変化、学生の質の変化、外部からの本学の見方の変化などを実行してきた事と照らし合わせて振り返り、次の5年に対処しなければならないと思います。実験、設計、演習、実技、少人数ゼミあるいは受講生がきわめて少ない場合には無条件に合格率を50%とすることを一律には実行できない場合もあると思います。このように難しい問題を沢山含んでいることに対処する場合に私達のとるべき態度としては、取り組むべき事柄が難しいから止めるのではなく、たとえどんなに難しくても、実行したほうが良いのではないかと思われる場合には、それを実行に移すことでしょう。なんとか工夫をして評価の客観性と年ごとの少しずつのレベルアップをたゆまず図ることが望まれます。

このように合格率を定めて推移した結果として、卒業不可能者数が“その1”で申し上げた数よりふえてきても、“その2”での数値に手心を加える必要はないと思います。“その1”で申し上げた毎年4%ずつ卒業できない学生数をふやすということは、その下界を提案したにすぎないのですから。

勿論、落とすばかりが能ではない、落とさないように教育すべきである、あるいは落とされた後のテイクケアが必要であるというご意見があろうことは十分承知しています。教育とは相手があってはじめて意味がある行為であると考えています。しかし相手によっては相手にしなくても良いと思っています。相手とすべき相手を教育するときには落としてはいけないと思います。私が在籍していた頃の海軍兵学校校長井上成美中将は当時全教官にたいし絶対に落第生をだしてはならないと厳命されました。それは全生徒は日本中から定められた期間定められた教育を受けて卒業すれば、直ちに初級海軍将校として社会に通用するはずであるとして選ばれて入って来たものばかりであるから、不合格者をだすことは教育が悪いことを直ちに意味するからであると説明されていました。(井上成美, 井上成美伝記刊行会) “玉”を教育する場合に不合格者をだすことは教育が悪い事を意味します。私達も“玉”を相手にしたときには不合格者を絶対に出さないように努力しなければならないと思います。

4-3 30年計画 その3 -講義の質-

4-2の具体案を作成し、実行に移った時には、“今後は試験の点数には無関係に以下に示すように合格率を定める”と学生に示すことです。当然学生の反発があることでしょう。今の学生の中には申告しておいて答案に名前を書き、それに加えてなにかを書きなぐっておけば当然単位の取得は出来るはずとっており、本学

はそのような大学であると思って入学してきている学生がいそうであるからです。彼らをこれから実行しようとしていることについて納得させることが出来ないのです。したら本学は今の学生天国で推移せざるを得ないでしょう。学生たちに本学の現状と教育方針とを、たとえ“団交”になろうとも説明し納得させることが必要です。向上する必要はなく、今のままでいたいという学生が入ってこないようにすることです。しかし、急いではいけないのです。世の中にはイナーシャがありますから、急激に方向を変更しようとしてもそんなに簡単には向きは変わらないでしょうし、反力が大きくなりすぎて出来ないことが多いと思います。恐れる必要はないのですが、過激に実行すれば反応も過激になりましょうし、無用の混乱は避けたほうが賢明です。じわじわと実行に移せば、学生はまんまと我々のペースに引き込まれてしまうでしょうし、それに対応できる学生にじわじわ変わってゆくと思います。ここへ引きこんでゆくのが教員の腕前ではないのでしょうか。

“世界に通ずる私の講義についてこれなくて何をほざくか”とひかえなおる自信のある講義をしなくてははいけないのです。このような講義では、講義だけが一人歩きをして、学生には全く理解できないだろうから講義をすることが無意味になるという意見もありましょう。そうかも知れませんが、一挙に講義のレベルを上げることを考えず、じよじよに高めてゆけば目的は達成できるのではないのでしょうか。いずれにせよ“私についてこれない学生は退学しなさい”と言い切れる自信を持たなければいけないのです。不合格という評価をした場合に、その評価にクレームがついても自信をもってそれに答える教育が重要なのではないかと思います。30年計画その2とその3の主目的は実にここにあるのです。本学だからこの程度の講義でよいと思っははいけないのです。“その程度は”と言う考え方は多分自分勝手にそれを作りあげて自分に“温泉ムード”を作ってしまうがちなのです。どれほど講義の理解程度あるいは習得成果を厳しく評価しても学生が納得できる素晴らしい講義をしなければいけないのです。適当に10分遅れ、10分早仕舞いをする、何でもらしいことが書いてあればそれで合格と言う講義や評価は厳しく排除されなければなりません。

このことは副産物を伴ってくるでしょう。どの科目を選択しても不合格になる確率は同じであるし、合格(単位取得)は努力し学問そのものを手堅く身につけない限り得られないと学生が自覚すれば、学生は形式的に最も単位の取得が容易な授業科目を選択することなく、最も関心の高い授業科目を選択することでしょうし一生懸命努力することでしょう。素晴らしい講義には学生が教室に溢れ、むさぼるように講義を聞くことでしょう。昭和の初期の斎藤秀三郎先生の講義では教室には入り切れない学生が廊下は言うに及ばず窓の外まで立ち尽くして聞いたと言うことです。なかなか出来ることではありませんが、一生のうちに一度はこんな講義をしたかっ

たと思っています。

もう一度申し上げます。あせってはいけません。30年間かけてやることです。

4-4 30年計画 その4 -試験問題と採点-

さきに申し上げた兵学校校長井上成美中将は、教官にたいし“教育漫語”という文書を配布されていまして。(井上成美, 井上成美伝記刊行会)それは井上校長の教育方針を示していたものですが教育方針とはおっしゃらなかった。それは方針を示すものでありそれを批判することは海軍では許されない。しかし“漫語”はどのように批判してもよいし、どのように意見を申し述べてもよいということであったようです。その中で井上校長は試験問題に触れています。試験問題は一夜ずけで書けるような問題をだしてはいけません、試験は暗記力をためすような方法を避け科学的思考力や生徒が身につけた“センス”の程度を知ることが出来るようにと示しておられます。

私も全く同感であります。暗記してくればよいような問題、教科書の何処かを転記すればよいような問題、式に数値を代入すればよい問題、2, 3の単語の並列あるいは教科書の索引をひけば容易に正解が得られるような問題などは好ましくない問題と思っています。教科書やノートは世の中へ出れば仕事をする時にそれを見ても絶対に不正行為とは見なされないのです。教科書、参考書そしてノートをみながら業務を遂行することは一向さしつかえのないことですから大学でもそのように教育しておきべきでしょう。それらを参考にしながら直面している問題に対処できる習慣をつかさねるために試験を利用することはいけませんでしょうか?むしろそのような問題を出すべきであろうと思います。勿論、授業科目によってはそうもできない授業科目もあろうと思います。しかし前以て用意した紙切れが役立ったり、机の下の教科書が役立ったり、さらには隣の学生が書いている事を盗み見して答えらしいものを書ける問題を出すことは避けなければならないことです。そんな問題ではない問題が出せるように教員は講義に配慮するとともに工夫をすることが必要です。

採点を終え、点数を控え終わったら答案はなるべく早く学生に返却することが望ましいと思います。私はそれには三つのメリットがあると考えています。一つには採点のミスが学生が見つめてくれることです。採点にミスがあること自体許されることではないのですが、神様ではないのですから時としては足し算を間違えることなどがあつたりします。その時には学生にただひたすら謝り、すでに成績が提出済みであったならば速やかに教務課に訂正の手続きをとるしか方法はありません。そ

れにしても間違えた点数が成績原簿についてしまうよりずっと増しでしょう。

二つには、採点に納得がゆかない学生が採点のあり方について聞きに来ることで、これを説明することは講義をする上で非常に役立ちます。学生が講義をどういうふうに理解したかが分かりますし、分かるはずと思いこんで講義をしても大切な事が十分伝わっていないことが分かります。さらに講義をどのように聞かなければいけないのかを説明するのに最適の機会になります。また講義に対して極めて有意義な情報を学生が提供してくれるのです。答案を返却することは教員自身のために行うのです。

三つめは、どんなに厳しい採点をして学生がそれを納得することであり、このことがたとえ不合格であっても学生が自らの努力が足らなかったことを認めることにもなるかと思えます。そして学生全員が採点の公正さを監視することが出来るのです。

立派な講義を行い、よい問題を出し厳しく評価することが重要であると思えます。

4-5 30年計画 その5 -志願者の数-

実行に移って約10年位経過したところから、徐々に对外宣伝を始めます。受験雑誌や予備校や高校の進学指導の先生がたに過去10年の成果(卒業生数の推移、各授業科目の合格率の変遷そしてそのようになっている理由など)をそろそろ示し始めます。さらにはそのような教育方針を貫くために入学者数もへらしていることも定量的に示します。高校ではすでに卒業生を通じて本学がどんなやり方をしているのかを知り始めているはずで、そして“石”を送るかぎり本学では絶対に卒業出来ないことを明示すべきです。そうした時に果して定員割れが生ずるでしょうか。こんなことをすれば本学への受験生はなくなってしまうという意見は多分あるはずで、今までに申し上げた30年間にやるべき事を2、3年で極めてdrasticにやったら受験生は間違いなく大幅に減る事と思えます。しかし卒業生数を毎年4%へらしても受験生は自分はその中に入らないと思ひ、それは自分とは関係のないことと考へて受験することでしょう。授業科目合格者を毎年10%へらしてもそれは受験生にはそれほどピンと来ることではないのではなからうかと私は無責任にも高を括っているのです。だから30年が必要なのです。情勢をみながら進めてゆけばその時その時に生じる事態に対応しながらどうにもならない事態に立ち至る事がないように方向を修正しながら実行することが出来ることでしょう。実行とともに不断の見直しが求められる所以です。

受験者数が減れば受験生には取り組みやすい大学と映る事でしょう。そうすると受験生はふえてくるのが従来の方向です。しかし受験生は受験雑誌などで本学の教

育方針を知り、あるいは口こみで本学を知って受験して来るでしょうから、慌てずじっくり構えれば受験生の質が少しずつ変わりながら成果はあがると思います。そして成果があがるまで厳しく辛い永い時を過ごさなければなりません。

69万人（30年後は30万人？）もおればその中にはそんなところが面白いと思う学生が1000人位はおるに違いないと楽観していますが“ダメ”でしょうか。本学の未来に期待を持ちたいから“ダメ”と思いたくないのです。本当に“ダメ”なら本学の未来はないような気がします。定員割れはおこらないし、多分1000人の同志が集まってくると思います。

4-6 30年計画 蛇足 — 教員だけが努力をすればよいのか —

極めて重要な大前提が後の方にきてしまいました。大学の質の向上は教員の“臥新嘗胆”のみで成果が上がるものではないということを忘れてはいけないということです。そのためには、30年間に他大学が実施すると同程度、あるいは現在の本キャンパスの施設状況からすれば、他大学以上の設備投資が行われなければならないということを忘れてはならないのです。これは教員側で努力することではないのですが、それがなければ、教員がいかに厳しく辛い永い年月をかけて努力してもそれは全く無に帰することになるのです。尾山台キャンパスの教育研究施設は他大学のそれらと同程度あるいは他大学以上でなければならず、そのための設備投資は本学の質の向上に絶対的に不可欠な条件であることを明示しておきたいと思います。老朽化した施設の中での精神論的な努力だけで大学の革新ができると思うことは、例えば古くて恐縮ですが1941年頃の日本の精神状態と全く同じです。いかに竹槍の数をととのえて、その操作を訓練したとしても、B29の撃墜などは全く不可能なことなのです。いささか過激な表現になりますが、もし新学部の立ち上げで息が切れてしまい、尾山台キャンパスの整備が他大学に引けをとらないかそれ以上に、今後30年間に出来ないのならば、先生がたがいくら頑張ってみてもそれは多分実を实らない事になるのではないかと懸念しています。教員の努力が生きる、あるいは努力を促す設備の充実が、かつての栄光を再び獲得した武蔵工業大学に戻るために尾山台キャンパスに求められる必須の条件なのです。

施設の更新を、それを使いながら行なう事は、更地に施設を新設するように楽な仕事ではありません。30年間に亘る長期的な設備充実計画の立案と着実な実行が強く求められるべきであると思います。これ無くしては武蔵工業大学の再生は絶対にありえないと強く感じています。

ここに申し上げた30年計画は、一人一人の先生方が積み上げる努力なのです。大学にはそれらを結集する30年に亘る教育再建計画が必要です。そして、その物

的基盤となるべき施設の30年計画も本学の再建に向けて不可欠であると思います。新学部設置は尾山台キャンパスの再建計画とは別のものでありましょう。勿論新学部の発展に尾山台キャンパスの存在とそこでの先生方のそれへの援助は絶対的に不可欠ではありますが、新学部の発展と尾山台キャンパスの再建とは別であり、それらを混合してはなりません。新学部がスタートしたならば尾山台キャンパスの再建計画をなるべく早く完成し、教職員に提示することが必要です。遅れば遅れただけ武蔵工業大学は世の中から立ち遅れてゆくことになってしまうような気がします。

ベルギーのリエージュ大学は、市の中心から約10km離れたところに素晴らしい新キャンパスを完成させ、現在移転中です。キャンパスの移転計画が話題に上がってから丁度30年だそうです。そして捨てられる旧キャンパスは、本学の3号館を除いた尾山台キャンパスよりはるかに“まし”なのです。

5. その後の計画 —世界に向けて—

今から40年後およびそれ以降のことです。その頃の日本の状況を推測することは至難の業と言わなければなりません。しかしその頃には、武蔵工業大学は国内では厳しい教育を実行し、素晴らしい成果をあげていると評価された大学になっているはずで、そこで国内から目を世界に向けることとなります。

現在では、卒業研究は大学において主として教員が指導する研究活動に従事し、可否の判定を所属する学科の教室会議などで実行しています。そのような卒業研究とか卒業に必要な単位数とかの概念が40年後に存在するかどうか分かりませんが、このような研究活動はその期間を今より少し短縮します。それを卒業のための一つの条件とすることは今と変わりません。それに加えて現場における実務経験を重要な卒業条件とするのです。この先に申し上げることは現時点では全く不可能なことだと思います。ここでいう実務経験は外地におけるボランティア活動であり、外国政府の指導監督のもとに活動に従事することを意味します。当該政府からの評価を卒業の可否を決める条件の一つにしようというものです。海外で学生が事故に巻き込まれたらどうするかとか、そのときの責任をどうするかとか、外国政府がそんなことを引き受けてくれるのかとかという議論が多分でてくるでしょう。40年後の“海外で”という概念は今のそれとは全く違っているに違いありません。そしてリスクを恐れては前進はないのです。未知の世界に踏み込むことは限りないリスクへの挑戦なのです。それにしても、今申し上げたことについては現時点では問題点をはっきり把握することが出来ませんのでこれ以上の議論はとて出来そうもありません。しかし、日本の武蔵工業大学だけでなく、世界の武蔵工業大学となるための努力は今の本学の国際交流と言っている活動とは全く次元の違っているものでなけれ

ばならないし、それへの取り組みはそれぞれの時点において積極的に行なわれなければならないと思います。

目指していることは、極めて誠実な 1000 人の学生諸君が 1 年間に亘り世界中に散らばって、現地の人たちと一緒に喜び、悲しみ、時には怒り、生活をともにすると 10 年間に 1 万人の学生が世界の各地でそれぞれの国に住む人々と知り合いになり、その結果として表題として掲げた会話が 50 年後に交わされるのではなからうかと希望しているのです。

今から 40 年後に、今の学部と大学院と言う制度が存続しているかどうかは判然としません。30 年計画はどちらかという学部を対象としての内容になっていますが、しかし基本的には私達教員の学生に対する態度は、学部と大学院とで大きく異なるべきものとは考えていません。大学院に対してはもっと厳しい態度で対応すべきでありましょう。私ども自身に厳しい意識改革と現在以上の教育ならびに研究への努力が求められるべきであるのではないかと思います。

6. 私達は何故大学の教員になったのか

6-1 私の場合

1945 年 8 月、日本は戦いに敗れました。そして愛する人たちや美しいこの国土を命をかけて守るべき責務がなくなってしまった時、私は生きる目標を失ったのでした。江田島から両親の許に帰りぼんやりと日を過ごすうちに世の中は段々落ちてきて進学が話題になるようになってきました。しかし何をこれからやるべきなのかについては全く決められないうちに出願時期になってしまいました。父親は、”軍人どもがくだらない戦争をして日本中灰だらけにしたのだから灰の後始末をするのも軍人の片割れの一つの責務である。従って土木屋になってその償いをしろ”と土木工学を奨めました。正直なところ土木工学とは何であるかはよく分からないままに土木工学を専攻することにしました。卒業するときになったら、恩師から東京大学に行け、そのときは東京大学の教授の指示に従えと言われ、これまたよくも考えずに東京大学に来てしまいました。

10 年間助手を勤めた時、武蔵工業大学へ行けといわれました。その時私の恩師は武蔵工業大学がどんなものであるかは全くご存じないままに私にそこはどうかとお話になったのでした。そこでどんな所かとに角見てきなさいと教授は私に命じられて、私は本郷から電車に乗って尾山台まで来まして、地図から、訪ねている物にたどりついたようですが、どう最良めで見ても大学とは思えないような状態で、とても最近着任された方々には想像すらできない状態でした。本郷に帰ってそ

のように申し上げますとそれでは行くことはやめにしようと 2 人の意見は簡単にまとまりました。しかし、武蔵工業大学はそのままにはしてくれませんでした。再度、教授に働きかけがあったようで、とうとう承知させられてしまったのが運の尽きであります。こんな経緯で本学に奉職することになった私が偉そうなことなど皆さんに申し上げる資格があるとは思いませんが、定年まで大過を犯しながらもなんとか勤務して来たということからお許しを頂きたいと思います。

6-2 普通には

そんな低次元の私とは違って皆さんは、科学技術の振興そして科学技術教育の重要性を十分にご認識になられ、会社に就職して会社の利益のために働くことで社会に役立つことや、行政の世界にはいり行政を通して社会のために役立つことなどをお選びにならないで、本学に奉職なさっておられるものと思っています。勿論そのような分野にお進みになったとしても、その分野で人並み以上にご活躍になれる才能は十分お持ちであり、大学に於いてのほうがより社会に貢献出来るものが大きいとお考えになったうえで教育研究機関である本学にご勤務になったものと確信しています。即ち、先生がたは、大学という教育機関における研究教育活動において、先生がたの能力は最大に世の中のために役立てうるとお考えになっておられるものでありましょうし、そうなのです。従って定年退職までその観点において大学の中に存在意識を明確にお示しになり、学内のすべての人々がそれをお認めになることこそ初志を貫徹され、さらに自らの能力を最高に発揮され、その全てを世の中に還元した人として尊敬されてよいと思います。誤解を恐れるあまり極端なそして下品な表現を付け加えさせて頂きたいと思います。それと申しますのは、つぎに申し上げるようなことは上に申し上げた尊敬されるべき活動ではありませんということです。すなわち、活動的であることのみを念頭に置き過ぎ、活動範囲を目立つ場所のみに置き、本学での教育活動を非常勤講師的に行い、御名声が外から学内に聞こえてきてあたかも外の大学の先生であるかのような印象を学内の先生方に与えてしまうことです。そのようなことは本学としては尊敬するには値しませんが、しかしそのお名前を利用して頂く方法を考えてもよいのかもしれない。

そのようになさる方がいらっしゃるとすれば、それにはそれなりの理由があり、もしそのような方ができてしまったとすれば、大学人の良識からすれば、大学にそのような行動をその人にとるようにしてしまった何らかの欠陥があったのかもしれない。武蔵工業大学には、全教員が武蔵工業大学教員としてベストを尽くすことが出来る大学環境を整えるべき義務があります。もし現状がそのようなものでなければ、整備計画を示して、教員の努力を促すべきであると思います。計画が示され、

それが年度ごとに着々と整備されている時、現状に飽きたらなくて外へ活動範囲を求めるとは、武蔵工業大学の教員としての認識にかけるものがあるのではないのでしょうか。実情とそれに対する計画を認識したうえで奉職することを決意したので、それらが意に満たなければ、満足できるところに転職してゆくべきではないのでしょうか。世の中、左様に理屈どおりには行きませんが常識的な限界はありうるのではないかと思います。

6-3 大学教員の裏の仕事（大学管理）とそれに携わる人

さて、私達が勤務している大学はいうまでもなく科学技術の振興発展のために研究活動や、それらをやがて支えてゆく次世代の技術者や研究者を育成する組織です。組織には、その円滑な活動を維持するためそれを管理運営する組織や業務が必要です。このような組織や業務に先生がたが深入りされることは科学技術発展のために、世界中の人々のために勿体ないことです。そのようなことに入り込むより遙かに本来の業務を遂行することで、人々のお役に立てる人ばかりなのです。しかし、そのような仕事に従事する人はやはり必要です。将来はいわゆるプロとしてそのような業務を処理する人が養成されてくるかもしれませんし、多分そうなると思います。しかし、たとえそうなくても教員がその組織の中に入らなければならないことは避けられないことでしょう。

そこで、どのような人がその立場に立つことが大学のために望ましいかという問題が出てきます。選挙による場合、互選による場合あるいは学長が指名する場合があります。どの場合であっても最も好ましい人がなることが一番よいにきまっています。そこで一番よいと判断する物差しが必要です。よくあることですが、物差しを明確にしないで“よい”とか“悪い”とかを議論することがありますがこのような事は避けなければなりません。判断の基準が同じでないのにいくら議論を重ねても結論には到達出来にくく、双方が自分勝手に正しいと思っていることを主張し続けるだけに過ぎないからです。会議で議論が収束しない時もこんな状況の時がよくあるのではないのでしょうか。

冒頭から長々と申しあげてきたことも私の物差しで“あるべきである”と考えたことを申し上げたに過ぎません。この物差しそのものが本学の将来を方向づけるものには全くなっていないとお考えの方も多数いらっしゃると思いますし、いらっしゃるなければならないのです。是非、来年の教育年報で本学の50年後はこのようであればならないし、それにはこのようにすべきであるとお示し頂きたいと思えます。さもなければ、それは現状の肯定であって、すこし言い過ぎかもしれませんが、教育を受けたくない学生を集めて世界に通用しない学士（工学）を卒業させ

ることになりかねないと思いますし、これは大学の安楽死への道の選択になるのではないのでしょうか。

話がそれましたが、ここで大学の管理運営にあたるに望ましいと判断する物差しをお示ししなければならぬと思います。それを申し上げるまえに極めて示唆に富んでおり、予てから私が判断の拠り所としていた言葉を紹介しておきます。

“ともかく、大学の総長選挙ほど選挙と名のつくもののなかで公平と申すか、競争のない選挙はないでしょうね。候補者について政策の発表をしたらどうかとか、せめて履歴くらい知らせたらどうかという声があるけれど、何しろ名乗り出る候補者ではない。すべて推されて受けるということですね。ですから、政治的な意味どころか、まったく運動のない選挙です。これは一つの学園にふさわしい特色ですね。その意味では理想的な選挙だと私は思っております。”（南原繁回顧録，丸山真男・福田敏一編，東京大学出版会）

昭和21年の秋に、内田総長が退陣要求を受けられて総長を辞任されたあとの総長選挙で、南原先生が東京大学の総長に選出されたとき、福田先生が“総長選挙”についてご質問になられたときのお答えの一部です。

前にも申し上げましたが、私達は教育ならびに研究にこそ私達の生きている意義が最高に果たされるのでありますし、このように考えるとき私たちは定年退職までそのような状態を保っていなければならないのです。人間として生理的に保ち得ない年限が規定されているとしたら、そのような規定は成るべく速やかに改定されるべきです。いまの制度が正しいとするならば、私達は定年退職の日を迎えるまで、私達本来の使命を全うすべきで、それ以外のことに関心を示すべきではないと思います。それが誠実な勤務態度であると思っています。

しかし、前に申し上げたように大学にはそのような勤務が可能であるように管理運営する教員が必要です。誰かが犠牲になってそのような仕事に従事しなければなりません。誠実に勤務しておれば、このようなことに巻き込まれることは誠に迷惑千万なことです。しかし、誰かがやらなければなりませんから、もっとも望ましい人に無理を承知でお願いすることになります。ですから、南原先生がおっしゃったようなことになってくると私は思います。誰でも良いというわけにはいかないと思います。皆さん高い能力をお持ちですから誰でも良いようにも考えられますが、人によってはこのような仕事には本能的に拒否反応が出てきてしまうことがあります。最適の人を選ぶべきであると思います。

頼まれた場合には、とくに支障がない限り引き受けるべきでしょう。そのような煩わしいことを背負ってくださった人のお陰で、多くの仲間の信頼を受けるほどに仕事をしていくことができたのですから。しかし、覚悟をすることが必要です。皆さんの期待に応えるように仕事をするとは並大抵のことではありません。助

教授や助手がいて研究室活動を継続してくれれば良いのですが、そのような人がいない場合には、研究室活動が止まってしまう恐れもあります。重要なポストであればとても片手間ではできないような現状に本学はあると思います。

6-4 どんな人をお願いするか

慎重に考えなければなりません。兎に角大変な迷惑をかけることになるのですから。そして判断を間違えると私達の大学の発展を阻害することにもなりかねないのですから。お願いすべき人が備えていることが望ましい条件を思いつくままに箇条書きにしてみます。

- 1) 視野が広く、常に全体を見渡すことができること。
- 2) その人が判断するときの基準は大学を向上させる事のみを念頭においてること。
- 3) 大学の将来に納得のゆく将来像をもち、将来への見通しができること。
- 4) 責任感と実行力に富むこと。
- 5) 権力を持ちたがらないこと。
- 6) 役職につきたがらないこと。

これら以外にもあると思います。しかし見直してみると上の6項目はあまりにも陳腐であり、いまさら書いて皆さんに見てもらおうようなことかと思わざるをえません。

第5項の権力についてチャーチルの言葉を書き添えてご参考にしたいと思います。“権力は他の人々の上に君臨し、あるいは自分に錦を飾るためのものであれば、当然のことながら下劣と判断される。しかし、国家の危機にさいして、どういう命令をくだせばよいか分かっているときには、権力は神のたまものである。”(第二次世界大戦, W. S. チャーチル著, 佐藤亮一訳, 河出文庫) そして兵学校校長井上成美中将は太閤記を生徒が読むことを禁止されました。それは秀吉は権力をうるために権謀術策を弄した。このような生き方は生徒の鏡にするには値しないということであったとのことです。(井上成美著, 井上成美伝記刊行会)

第6項はもし役職などにつきたいと思っている人がいるとしたら、その人は誠実に大学に勤務していないことを意味することになるわけで、まじめに勤務していない人に重要な仕事をお願いしないほうがよいのではないかと考えるからです。しかしこの論理はそれほど説得力があるとは思えません。いやいや冒頭から説得力なぞありゃせんというご意見もあるかもしれませんが、そうでしたら“それほど”を“全然”にお変え下さい。

7. あとがき

私は、昭和34年の夏に、海図上に瀬戸大橋の中心線を書き込みました。瀬戸大橋の建設のまさに第1歩でした。約40日の真夏の瀬戸内での作業は文字どおり厳しく辛い作業でした。同行した大部分の人たちは、作業が終わりに近づいたころには疲労のため食事をとることが出来ず、毎朝病院に立ち寄りブドウ糖の注射を受けることが日課でした。当時の私は瀬戸大橋をこの目で見ようとは思っていませんでした。しかし、その後20年間に渡り、日本中の橋梁のエンジニア達が新しい研究成果を反映させながら私達の原案に手を加えてゆきました。そして中心線的位置は殆ど変わることなく、最初のコンセプトは踏襲されながら昭和62年に竣工しました。

この小文で申し上げた作業は瀬戸大橋建設よりもっと厳しく辛い作業かも知れませんが、しかし、きっと出来上がると思っています。

私が本学に勤務し始め、しばらくした頃、私達も学生も受験界も我々は早稲田大学を追い越せば日本一の土木工学科になると考えていました。そして日本一になるろうと一生懸命努力してきた積もりです。しかし、退職する時になってみるとなんと実情はとんでもないことになっていることを認めなければならないことがあまりにも情けないのです。一班の責任を負わなければならないと思います。こんな文章で私の責任が逃れられるものではなさそうですがこの程度しか思いつかない自分にただただ情けなさを感じただけです。皆さんのひたすらな努力を見つめさせて頂くだけです。焦らないで着実に50年かけてお進み下さい。

西脇先生ありがとうございました

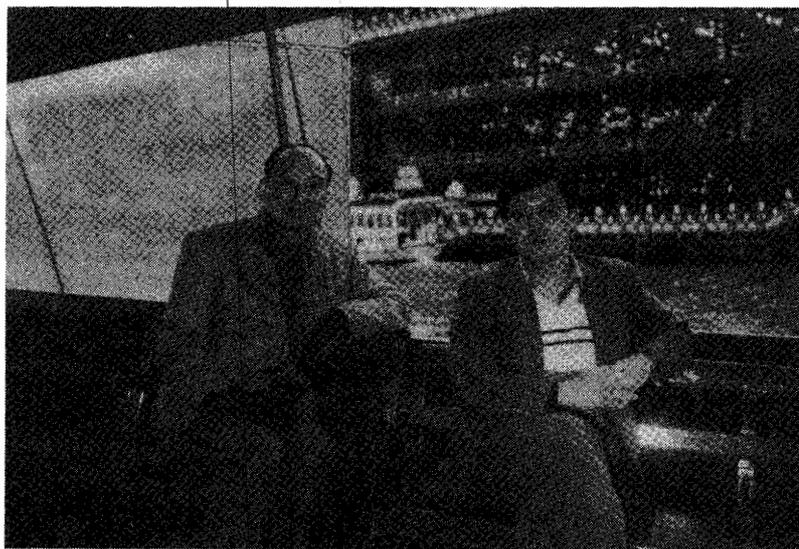
増田陳紀

西脇威夫先生に最初にお会いしたのは、再履修生のための応用力学の講義を1976年に半年ほど非常勤で担当したときが初めてだったように記憶しています。当時先生は学生部長をされていて、大変お忙しくまた星谷先生ともどもかなり大量に不合格者を出されたため、臨時で非常勤講師を採用されたのだと思っておりました。しかし、その3年後に筆者を武蔵工大にお呼び頂き、先生のお考えが分かってくるようになりましてから、あれは筆者を観察するためであったのかと思うようになりました。先生は本学および学科の将来を常に長期的視野にたって考えて来られ、最も基本となる人材について、具体的な事例は割愛致しますが、専門分野、実績のみならず、年齢構成、学科目構成、将来の展開を重視して検討されました。その結果は、筆者の場合のように必ずしも先生の見論見通りにはいかなかったケースも若干はありますが、現在の学内での土木工学科の構成に対する高い評価となっています。



筋を通す・場当たりの行動はしない、これが先生の生き方だと思います。教授会等での理路整然とした発言や姿勢の良さにその生き方が反映されています。人事に限らず授業と成績の評価についても同様で、設計製図一科目あるいは鋼構造学一科目のために卒業できず留年した学生や、卒業はしたものの卒業証書を取り上げられた学生も、少なくはありません。そのため未だに先生を快く思っていない卒業生もいらっしゃるかもしれません。しかし、先生は無理な要求をしているわけではなく、例えば、本当に国家公務員試験合格のための勉強をしているなら、図面の提出期限を延期してもよい、その替わり合格通知を持って来いという対応をされます。要は如何に真剣に学生がその能力を発揮するかを期待しているのです。かつてはこのような姿勢に好感を抱いて、先生の胸に飛び込んでくる意欲満々の学生が多かったようですが、だんだんそのような何をという気持ちを表わす学生がいなくなってきたのは寂しいことです。

上記のような先生の態度は、校長先生をされていた御尊父と敗戦間際の海軍兵学校時代の教育、特に敗戦後の日本を背負って立つ人材の育成に情熱を込められた井上成美中将の影響が大きいと伺っています。今でも家族を含めると三千名の集まりになるという同期会を毎年開かれていて、その人脈の広さは驚異ですし、その恩恵に浴している例は数多あります。兵学校時代のお話はよくお聞きしましたがここではその話は省略し、先生が作り上げられた研究室の最大行事に移ります。鋼構造研究室、以前は橋梁研究室と称していましたが、では毎年集中ゼミと研究室親睦ならびに現場見学のため夏季合宿に行くことが恒例となっています。



この20年ほどはもっぱら江田島にある国立青年の家を合宿所としてゼミとスポーツで頭と体を鍛え、合宿の前後に阪神地区、中国自動車道、本州四国連絡橋などの最新の現場を選定して見学しています。江田島は御存じの通り、海軍兵学校のあった場所で、現在は海上自衛隊の基地があります。基地内には東郷元帥の遺髪、日清・日露戦争関係資料等の他に太平洋戦争において17～18歳で戦場に散った特攻隊の遺書を収めた教育参考館があり、学生は毎年心を打たれて出て参ります。青年の家では朝は便所掃除から始まりますが、先生は率先して便所掃除の仕方を実技指導されますので、退所する頃には皆かなり上手になります。また合宿でのメイン行事はカッター訓練で、青年の家の教官より年期の入った西脇教授の号令の下、乗るまでの不安と、漕いでいるときのきつさと漕ぎ終わったときの爽快さとその後の風呂場でのしみる痛さを味わうことが研究室の伝統となっており、時代を超えて同窓会で共有する話題ができることとなります。瀬戸大橋は既にでき上がってしまいましたが、アプローチ部を含めると着工から完成まで十数年かかっています。この間研究室では先生の引率のもと毎年架設中の現場を見学し、また完成後も管理センターの視察などを行っています。この瀬戸大橋のルートは実は先生が若かりし昭和30年代の初めに、自ら得意の水泳で瀬戸内海の海底に潜り選定されたものであります。県知事や後の総理大臣などからいろいろと口出しがあつたりなかつたりだったそうですが、とにかく現地には馴染みの飲み屋もあり、見学の後につれて行って頂いたものでした。最近では時代の変化でそれほどではなくなりましたが、研究室の懇親会の際には酒の飲み方・勤め方を学生に教示されるのが常でした。先生は酩酊



されることがなく、少し召されたかなと思うころ、飲むほどに再び元の状態に戻るような、理想的な嗜み方で、その点だらしない筆者は胆を入れ替えねばなりません。研究指導、発表会での学問に対する厳しさと、それとは対照的な穏やかな飲み方に惹付けられて、日本中どこにいても先生の周りには卒業生が集まってきます。

先生は東京大学に在職されているころに、ルート選定のみならず幾つかの新形式橋梁の設計に携われ、それらの橋梁は現存しています。そのような実務の経験と研究者としての知見を請われて、道路橋示方書アーチ編の制定も御担当になりました。学位論文をアーチ橋に関する研究で取得された後、後年は高力ボルトの引張接合に関する研究を精力的に行われ、土木学会田中賞論文賞を受賞されると共に、日本鋼構造協会において、本接合に関する設計指針を作成するための委員会を主催されました。この様な研究のみならず土木学会においては、戦後初代の論文集編集委員会幹事長、実質的には現在の委員長、を長く勤められ、また、後年には図書館委員会の委員長を勤められて、まもなく川崎に完成する土木資料館の実現に尽力されました。

この間学内では前述した学生部長の他、私情協の委員となられると共に、立ち上がり期の情報処理センター所長としてセンターの方向性を示し、また評議員・理事として大学全体の運営に時間を割かれました。教育の問題は一大学だけの問題ではないとのお考えから大学セミナーハウスの企画委員会委員もお務めになり、最近同センターの理事長でもある元東京都立大学総長の佐野先生が主催する教育問題懇談会—フォーラム寺子屋—の幹事役として後輩の指導に当たっていらっしゃいます。

これまでたっぷりと大学・社会に奉仕して頂きましたので、持病の腰痛が悪化しないよう仕事の趣味は適度にして頂いて、世界各国のご友人と語らう旅行を交えて、クラシック音楽、写真、庭いじりなどの御趣味を奥様と楽しまれながら、我が研究室同窓会の武蔵橋友会を見守って頂きたいと存じます。西脇威夫先生ありがとうございました。

◆ 会員だより

<特集> 西脇先生の御退職に向けたお言葉

西脇威夫先生の御退職にあたり、橋友会OBの方々及び西脇先生と長年親しくされていらっしゃる、関東学院大学の倉西茂先生より、西脇先生の御退職に向けたお言葉を頂いておりますので、ここでご紹介致します。 (安達 好彦, 修士1年)

古き思い、そして今思うこと

35年卒 奥石 繁

西脇先生、40年に渡ります学内外におかれましてのご活躍、本当にご苦労さまで御座いました。先生にお会い致して居りますと、ご定年と言うイメージは全く感ぜられません、何か暦のいたずらを感じずの思いが致します。またこれは、お会いする度に「現在の社会環境の変化と、大学の危機感」を訴え、何かをしなければ、と言う大学への思いをお話されることから実感致します。そして、今日まで、私どもはじめ、500名になんなんとする武蔵橋友会会員の一人ひとりを、厳しく或いはご熱心に、ご指導下さいまして誠に有り難う御座いました。武蔵橋友会諸兄を代表致しまして御礼を申し上げます。

先生が昭和34年に本学に来られまして、私たち35年組が先生の最初の授業を受けましたのは、当時、武蔵工業大学にはまだ多くの木造建築の校舎が残っておりまして中の、屋根裏教室での橋梁製図の授業を思い起こします。その橋梁製図は学生時代の製図としましては、なかなか難解な、溶接・リベット併用のトラス橋で、しかもインキング製図でしたので、大変な技術と申しますか、根気のいる作業で御座いました。最初から大変厳しいご指導を頂き、悪戦苦闘ではありましたが、お陰様でトラス橋の構造・製図法は勿論ですが、油砥石で鴉口を研ぐ職人的技術まで習得し、厳しさの中にもなかなか楽しい授業であったことを思い出します。その時の私の成果が卒業記念アルバムの中の1頁の背景を飾り、(検閲34-9-21西脇)の検閲印が捺され、懐かしい思い出の記録となっております。

私が武蔵工業大学に入りましたのは、土木であればダムをやろうとの思いで、当時、日本最大の35万キロワット水力発電ダム・佐久間ダムの現場から、電源開発を退職し入学したのですから、初志貫徹でありますと、当時の私としましては、ダムコンサルタント或いは総合建設業のゼネコンに入りますのが常道でした。今思いますと、私の人生の進むべき思考方向が、「ダム」から「橋梁」へと方向転換致しました岐路となりましたのは、先生との出会いは勿論でございますが、この橋梁製図そのものであったのではないかと、思っております。私にとって製図は昔取った杵柄でもあり、難解な製図も自称

傑作と自画自賛しておりました。これをみた先生、こいつを橋屋にしよう、と、卒論（卒業設計）は「撓度理論による吊橋の設計」（後々大変役にたちました）を命ぜられ、更に、卒業時には某橋梁メーカーに行かないかと言う就職指導を頂きました。先生曰「今は小さい会社だが、将来性のある会社だ」との一言に魅力を感じ、意を決したことを思い出します。

35年組はこのような私を含めます12名が、先生のご指導をいただきました。これが「武蔵橋友会」の源流となります「橋梁卒研グループ」、その後「橋梁研究室」、そして現在の「武蔵橋友会」と名を改め、会員数も平均しますと毎年10名をこえ、500名になんなんとする素晴らしい会となりました。今後も会員は増し、次世代に流れをゆだね永遠に不滅であることを願います。

世の中を見通し、先々を予測し、決断することは大変難しいことです。しかし、これは人それぞれその立場において、必要な決断をすることで、事が進行するわけです。私たちが卒業する昭和35年頃は、国鉄、新日鐵（八幡製鉄）、三菱等鉱山関係等々が国の機関的産業として隆盛をきわめておりました。これが20年30年後に現在のように、国鉄は民営化され、新日鐵は鉄鋼メーカーとしてはよく見えない企業に変化し、鉱山関係はすべて消滅の現状は予測出来たでしょうか。或いは、私が思いを抱いていましたダムも、大型ダムは、重力式の佐久間ダム、ロックフィルダムの美保呂ダム、アーチダムの黒部ダムと建設され、その後、ダムは下降線をたどり、逆に、橋梁関係が本四架橋はじめ、首都高速・阪神高速等々、此程になるとは思いも及びませんでした。

今考えますと、本四連絡橋の地質調査は始まっておりました。先生は20年30年後の本四連絡橋の完成を認識しておられ、更に首都高速道路は昭和39年のオリンピックを目指して始動しておりました。先生はこれらの認識から、これからは「ダム」ではなく「橋梁」だ。橋屋ならば、小さな会社に入って大きく育て。先生の当時の若さでこれらの判断、今考えますと大変大胆な気も致しますが、結果としまして、全てが的中し、私は敬服し感謝をしております。そして今思うことは、先生の若き頃の直感力・判断力に更に磨きをかけられました現状に於きまして、先生が大変に心配をされて居られます。「現在の社会環境の変化と、大学の危機感」がズバリ的中しなければ良いかと、更に、校名変更(?)もあわせて大変気になるところで御座います。これは武蔵橋友会にも大きな変化を余儀なくされることを意味するものではないでしょうか。幸いなことに、先生はご退職後も大学にでられるとお聞きしましたので、この問題について更に対策を講じられることとは思いますが、お身体には十二分にご自愛下さいますようお願いいたします。

最後に西脇先生の今後のますますのご健康とご活躍をお祈りいたします。

若き日の西脇先生の思い出

倉西 茂

月日の流れるのは早いものと知っていましたが、このたび西脇先生が定年退官され、改めてそれが実感されます。最近では、ダニューブ川をウィーンよりブタペストまで舟下りの国際会議を楽しみながら御一緒した楽しい旅行等が思い出となります。しかし、目を閉じると、今からもう40年以上前の若き時代のことが目の前に思い浮かばれてきます。そこで、少し、若き時の西脇先生の一面を書くことにします。

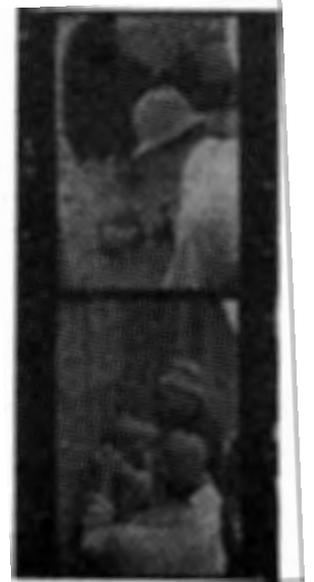
私が東京大学の学生として西脇先生にお目にかかったのは昭和27年の大学3年生の頃です。当時の橋梁講座の教授は平井先生でしたが、先生は他の用事が多く、一年間に授業されたのは3回程度で試験や設計製図をはじめ学生教育関係はすべて当時助手を務められていた西脇先生が仕切っておられる始末でした。当然そこで西脇先生に試験される羽目となってしまいました。それを全部鉛筆の倒れる方向で乗り切ったのは幸運でした。もう一人の助手は井出さんで、この方はもし戦争が長引けば日本空軍のトップガンになられる予定の陸士出身、方や海兵のばりばりと言う陣容でした。



東大橋梁研究室での平井先生と西脇先生

当時の橋梁研究室には当時として貴重品である、共和電業製の電気抵抗線動的ひずみ計なるものがありました。多分電気抵抗ひずみ計は日本の大学にあったのは二台程度で、京都大学の方が持っていたのは米国のボードウィン製の静的ひずみ計で、こちらは動的と名前の上では上等のような響きがありますが、これはなかなかの物で、これには大変苦勞をいたしました。この動的ひずみ計があると言うことで、実際の橋の応力測定をしようと言うことで、西脇測定隊長の下、それも先生の息のかかったローゼ桁の実橋測定をして回ることとなりました。

当時のひずみ計は基本的には紙の上に貼ってあるのですが、現場では湿気が入って使い物になりません。そこで、ベークライトベースのゲージを使うのですが、これを貼るにはベークライトのりを高温で溶かさなければなりません。と言うことは、朝早く海兵出身の隊長に起こされ、橋の側面にロープでぶら下がり、厚い鉄板をトーチランプで熱して貼ることとなります。ところがトーチランプでいくら暖めても鉄板と言う物は簡単には熱くなってくれません。何時間も一個所必死で暖めてようやく一枚貼れると言った作業を先生ともどもロープにぶら下がりながらしたのは今になってみれば良い思い出となっています。



住吉橋に自らグライダーをかける西脇測定隊長

測定した橋の一つに広島市を流れる太田川にかかる住吉橋があります。この橋も今述べたような方法で動的応力の測定をしたのですが、測定が終わって、役所の人が慰労会をかなり良い料亭でしてくれました。こいう作業の後ですから会が荒れるのは成り行きで、なにかの弾みに西脇先生とどんぶりになみなみと酒を注ぎあって飲み比べをする事に成りました。結果はこちらは急性アルコール中毒に罹り、起きられずその晩はその料亭に寝かされ、翌日まで魔される羽目となりました。先生は当然その後も芸者さんと仲居さんと仲良く楽しく飲み続けられたようです。



その後の宮島で西脇先生と私の記念撮影

橋友会会員の方々から一言

三十八年の長きにわたり本学の教育・研究に尽力なされ、特に橋友会員数五百余名をお育てなされた偉業に感謝とお礼を申し上げます。博多「美々卯」で酌み交わされた頃が偲べれます。

賛助会員 高山 勲

橋を創る仕事に従事しているにも関わらず、先生とは橋の話をした記憶が残念ながらありません。いつの日か、橋めぐりをしながら酒を酌み交わしたいと思います。

賛助会員 金野 千代美

私達が4年生で卒論を書いていたのは昭和43年～44年のことでした。当時、電算室は本館二階にあり、FACOMが夜を徹して稼動しておりました。私達は『たまき』のレバニラ炒めで腹ごしらえをし先生のご指導を受けておりました。

賛助会員 酒井 公二

先生、長年にわたるご指導お疲れさまでした。私が橋梁設計に携わるきっかけの一つに、先生の試験があったと思います。単純桁橋と連続桁橋の得失等を述べる問題等が印象的です。

賛助会員 松本 芳幸

先生の齒に衣を被せない物言いは、脅威であったと同時に人生のバックボーンでもありました。永い間本当にご苦労さまでした。どうぞお元気で過ごして下さい。

35年卒 和泉 四郎

昭和三四年、着任した先生は橋梁工学を一期に板桁橋から吊橋まで導き、その情熱を心に深くきざみ、橋作りを職としない者をも忘れ難い。世の漠々たる流れの中にあつて、一閃を見る。感謝。

35年卒 谷島 恒男

長い間ご苦労様でした。数十年間の教育活動の中、多くの難解な諸問題のあった時期もありましたが、先生の「終始一貫した教育方針」を通し続けられた、「教育哲学」に敬意を表します。

36年卒 藤井 豁傳

逆ローゼのH鋼が変形したことで橋梁オタクとならず基礎構造・管理運営・営業と企業の全ての部門に関与できる体質を得ました。社会への適合性を指導された賜です。有り難うございます。

37年卒 高谷 喜一郎

プレートガーダーとトラス橋の製図は思い出深い。この勉強で約束事は約束通り実行しなければならぬ常識が分った。今後は、鋼構造と共に倫理教育にも御活躍いただきたい。

37年卒 小林 健郎

受験戦争・敗・補欠入学で武工へ・何もしなかった一年間。何で先生に手紙を出したか記憶にはないが、その返事に書かれた一冊の本「構造力学演習」(梅村魁)に私は救われた。

40年卒 安藤 紘三

先生は、卒論の作業が佳境に入ってから、疑問を次の日に持ち越さない為にと、毎晩10時過ぎまで我々に付き合っ、尾山台の駅まで駆けて帰ったのが、強く心に残っています。

40年卒 吉野 勝美

①板桁・トラスの設計製図-計算尺・カラスロ ②卒論-タイガー-ハングル文字③酒-正月3日-小竹町 ④金精峠-ゼミ初見学山行 ⑤結婚式-スーパーインポーズ無し。

40年卒 李 和有

瀬戸内海に夢を求めてきた小舟、あの島は建設の音と共に車の通う橋へ変身、旅人の姿を追うと海に向かって叫んで「橋は技術の結集なり！西脇先生ありがとう」と聞こえる。

41年卒 岩田 充一

一山を駆け走って、時の牢獄の囚われから逃れ省みると、信頼不要で美辞麗句だけの日々でした。講義冒頭の「書物に誤述あり、看破して読め」は、未だ未だ必要のようです。追伸 師の教え、未だ健在といたい。ラクインキョは、体に悪し。

41年卒 野村 欽吾

あれほど姿勢のよかった我が師に腰痛はあり得るか、しばし呆然とし、永六輔の著作で読んだ「年月だけは、克服できないのが生きとし生けるのも宿命、だから楽しい」という一文を思い出した。素直でない私は、御退職に際して、先生、永い間有り難うございましたでなく、さらなる恩師のご発展をお祈り致しますと言いたい。

41年卒 林 俊介

私が研究室に入ったのは、二年次の時でした。環境は現在とは全く異なり、ガラス戸の木造でした。リブアーチの走行実験を際限なく繰り返した記憶があります。東名浜名湖大橋、摩耶大橋、瀬詰大橋の見学旅行も楽しい思い出です。長年の勤務ご苦労さまでした。そしてありがとう。

42年卒 堀内 岩夫

え！青年将校のようだった西脇先生に退職の日が来たなんて！！更めて30年前、武蔵工大最後の木造校舎で、先生、先輩、後輩諸兄と過した研究室での2年半を思い起こしています。

42年卒 前田 一朗

先生の退職の話を聞き、研究室での生活を思い出し、月日の経つのは早いものだと痛切に感じてしまいました。これからもわれわれのご指導よろしく願いいたします。

44年卒 奥山 立政

先生には、就職する時から転職に至るまでお世話になりっぱなしでした。今回、大学を退職されるに際し、寂しく思う気持ちと、これまでのご厚情に対し、感謝の念で一杯です。

44年卒 郷戸 健示

おめでとうございます。思い起こせば30年前、先生にお逢いし厳しくも暖かいご指導を頂きましたことは、私の人生にとり大切な宝となっております。今後もお身体を大切に益々活躍されますことを、心よりお祈り申し上げます。

45年卒 奥 哲夫

学部の1年から4年までの4年間色々とお世話になりました。橋梁研の恒例の江田島合宿を経験できなかったことが残念です。これからもお元気で、研究に励んでください。

46年卒 豊田 哲也

先生は、当時学内でも一番厳しいという評判でしたが、橋をやりたいの一心で入室させて頂きました。学業には厳しい所もありましたが、卒業後も公私共に大変お世話になり、深く感謝しております。今後もお元気で過されますようお祈りしております。

46年卒 木本 栄一

早いもので卒業してもう24年になります。私は橋梁メーカーに勤めていますが、先生に教わった事は今も仕事に役立っています。有難うございました。今後御指導よろしく！

48年卒 渡辺 誠一

私は、先生のように誠実に生き、自分を持っている技術の向上を目指し、一步一步確実に人生を歩んでいきたいと思えます。

50年卒 武内 和夫

橋は土木界の花形、酒は百薬の長、ともに先生のように楽しみとし、生涯の友としたいと思えます。7年間の学生生活とその後の社会生活において、親父のように面倒を見ていただき、感謝いたしております。

50年卒 由井 洋三

20数年前の入学時から、一向にお年を召さないお元気に感銘しております。先生の若々しさを21世紀橋梁への御提言、御助言として受け継げたら最高です。

50年卒 谷岸 淳一

卒業後、偶然にも東京・広島・(神戸)・名古屋と先生ゆかりのある地に住み、なかでも広島で拝見した先生の監修による旭橋のアーチとリベットの織り成す遠景と近景は格別でした。

50年卒 仲佐 俊之

卒業後早20年皆さんとやや違う世界にありますが、橋梁研での2年間特にお尻の皮の剥けた江田島合宿でのカッター訓練は青春の良き思い出です。西脇先生これからもお元気で。

51年卒 岡 淳二

学生時代、「夢の架け橋」と呼ばれた瀬戸大橋が姿を現し数年、まもなく二つ目、三つ目の「夢」が現実として姿を見せようとしています。「青い国、四国」へおいでください。

51年卒 源代 俊夫

橋梁研を思い出すと、いつもあいている1階のマド、徹夜のデータ整理、電算機との格闘、そして先生の教え！長い間ご苦労様でした。1卒業生として武蔵工大西脇研卒業を誇りに思います。

51年卒 桜井 孝夫

先生の背筋を伸ばしたその姿と、合宿研修で女子大生グループを前にしり込みする私たちを、「君たちが(誘いに)行かないなら僕が行く。」といわれ叱責された事が忘れられません。これからも前向きにご活躍されることをお祈りします。

51年卒 鈴木 良春

西脇先生、長い間ご苦勞様でした。私は、先生に対して若干反感も抱いておりますが(ブランドに弱いところ?)、先生の教育に対する理念、情熱、厳しさが好きでした。これからも健康に留意され、ますますご活躍されることを期待しています。

51年卒 橋 大介

退職おめでとうございます。第三の人生のスタートに際し、幸多かれと祈ります。皆様方にも今後とも御助力を賜りますことを仲人に成り代わりましてお願いいたします。

51年卒 廣中 宏治

時間は万人に平等に与えられている。「修論を見て頂きたいので30分程度時間が取れませんか」「君、30分は大変な時間だよ！」あれ以来、時間の達人にならねばと思いつづけている。

51年卒 望月 利成

「脚下照顧」、卒業時に先生にいただいたこの言葉を大切にしたいと思います。これからも、ご指導よろしくお願ひいたします。

52年卒 岡村 和之

一番の思い出は卒論の‘歩道橋の振動感覚の数量化’振動測定です。暑い日、寒い日、雨の日、槍の日(?)の測定、測定機器を壊したり……。現在は道路ルート選定をやっています。

52年卒 谷田 孝二



師の退職の報。遠いものとなっていた学舎の日々を思い出す。これまで先生は、どれほど若者を世に送り出してきたのだろうか。不肖の弟子たりとも言えぬ我が身なれど、先生の今後の御健勝を。

52年卒 直井 恒雄

卒業間近に、自分を安売りするな、との言葉を頂きました。迷い続けていた私は、少し自信が持て、上手に自分を主張する努力ができたと思います。20年経った今、言葉の支えに驚き、そして感謝しています。

52年卒 水上 守治

私の在学中、先生は学生部長の劇務を熟しておられました。年2回の江田島研修では有意義な時間を過ごしました。その時の「何事も精一杯やる！」精神は今も役立っています。

53年卒 菊地 孝明

独創性と熱意と結果を重んじられた。洞察力を試された。かつて、そこに飛び込めなかったことを悔やむ。そのことを常に意識している。先生に勇退という言葉はないと思う。

54年卒 菅澤 浩之

教育者として、研究者として長い間ご苦労様でした。教壇を去られても、大いに厳しく、ちょっと優しく、そして酒の好きな師として、いつまでもわれわれに御指導・御教授願います。

54年卒 田垣 尚

先生が定年で退職されるとお聞きし、残念でなりません。先生の道程を目標として、我々も頑張ります。先生の多大なご功績を称えるとともに、御活躍されることを祈念します。

54年卒 橋爪 哲也

現在、江田島に少し近い熊本の八代市に住んでおります。先生=江田島の教訓は、今も頭の中で活動し成長を続けております。機会があれば火の国熊本へも是非一度！

54年卒 松井 秀一

亡き父は教育者・研究者として歩み始めた私に、がんばれよと言って涙した。先生はその父に「まかせて下さい」とおっしゃった。私にとって二人目の父がそこにいると思った。

54年卒 皆川 勝

「技術者は一生勉強だよ。」と仰ったことが今でも心に残っています。生意気ですが、それが今でも私にとって心の支えになっています。これからも勉強を続けていく所存です。

55年卒 小林 正紀

西脇先生の長い武蔵工大での歴史の一コマに御一緒できたことに感謝し、雄大で美しい橋の設計にこれからも努力して行く所存です。先生の今後のご健勝をお祈りいたします。

55年卒 雑賀 浩規

西脇先生、長い間本当に御苦労様でした。江田島での授業、カッター訓練、サイクリングなど、とても楽しい思い出です。これからの第2の人生も健康に留意し頑張ってください。

55年卒 村上 博昭

鋼構造学の試験の答案が、「こんな溶接はできない」とコメントを付されて返却された。仕事で同じような状況に出くわすたびに先生の赤ペンで書かれた文字を思い出します。

57年卒 丸山 勝

「この金は、一体誰が払うんだ？」在学中に情報処理センターのエラープログラムの使用料金について西脇先生に怒られた言葉を今ではリピートしている自分を発見しています。

57年卒 宮本 伸市

西脇先生、大変ご苦勞様でした。"破面解析"を通して教えていただいた仕事に対する取組みを忘れずに頑張っています。少々怖かったですが、ありがとうございました。

57年卒 高木 勇一

長い間ご苦勞様でした。今後は悠々自適の生活をされると伺っていますが、少しは橋友会とそのメンバーにも時間を割いて下さい。そして、くれぐれもお体を大切にしてください。

60年卒 街道 浩

4年生になって間もなくの6月のある夜、実験中、西脇先生がぶらりとみえられて、「君たち、はりの理論というものが全くわかっていないな。」と一言。研究生活の始まりの瞬間でした。

61年卒 黒田 充紀

西脇先生との出会いは、新入生歓迎バス旅行で先生の横に強引に座ったことでした。優しい目をして、包み込む暖かさを感じ、次の日に鋼構造研究室の門をたたきました。

61年卒 横山 一浩

西脇先生といえば、4年の「構造物設計製図」で、期限に間に合わず研究室のみんなに手伝ってもらって製図を完成させたこと。今でも「カレーを作って単位を取った」とみんなに言われます。長い間の御教職と御研究活動に対し、改めまして敬意を表します。

61年卒 佐藤 祐一

長い間、大変ご苦勞さまでした。今、土木の事業は、大変厳しい時代を迎えています。今後は、今までよりさらに高い視点からのご指導をよろしくお願いいたします。

61年卒 鈴木 亘

西脇先生、御退職おめでとうございます。先生に指導して頂いたことを忘れずに橋梁技術者としてがんばっていきたいと思います。

平成4年卒 永田 考

御無沙汰しております。早いもので学校を卒業し、東京を離れ早5年の月日がたちました。なかなか御挨拶に伺えなく大変申し訳御座いません。さて先日、同窓の高橋君より西脇先生が御退職されると聞きしました。在学中、先生に頂いたアドバイスは、今も心に残っております。書面にて恐縮ですが、長い間、御苦勞様でした。今後も体に気を付けてお元気でお過ごし下さい。

平成5年卒 伊藤 俊

先生のご退職を迎えるにあたり痛恨の思いがしてなりません。学生時には本当にお世話になりました。どうぞご自愛専一になされ、更なる繁栄を遂げられますようお祈り申し上げます。

平成5年卒 高橋 実

西脇先生、御退職、おめでとうございます。西脇先生には、橋梁に関する事ばかりでなく、他のたくさんの方のことも教えられました。これからも御元気で居られることを・・・

平成6年卒 井出 親

研究室を離れ早一年、まだ私は会社に食べさせてもらっている立場ですが、西脇先生が送り出した諸先輩方に少しでも追いつけるよう努力してまいります。有難うございました。

平成6年卒 岩下 宏

卒業して一年経ちますが、仕事をしていると「待てよ、これでいいの？」というような先生の声がまだ聞こえてきます。大切な時を過ごしていたのだと思います。

平成6年卒 菊池 孝雄

いつまでも、いつまでも、いつまでも、厳しくいてください。

平成6年卒 尊鉢 丈裕

西脇先生、長い間御苦勞様でした。僕達が社会に出て早3年目、「石の上にも3年」という諺があるように、がむしゃらにやっていた1年目と比べて、だいぶ広い目で仕事を見つめる事が出来るようになりました。これも西脇先生の熱心な御指導があったからこそとつくづく実感しております。これからもいつまでもご健康で明るくお過ごし下さいますよう、お祈りいたします。

平成7年卒 小林 剛

西脇教授、長い間御苦勞様でした。西脇教授の姿が、大学の講義などから見れなくなると思うと寂しくも思います。総会で先生の元気なお姿を拝見するのを楽しみにしています。

平成8年卒 江藤 哲也

西脇先生、4年生、修士1年の中間発表会の時に、研究に対する厳しさを、日本語の大切さを、ご指導頂きまして有難う御座います。日本語の美しさを改めて実感しました。

平成8年卒 河上 守

いつも躓くたびに、西脇先生に救いの手を差し伸べて頂いております。先生の偉大さに少しでも追いつきたいです。

平成8年卒 渡邊 秀貴

学部・院と西脇先生には大変お世話になりました。特に研究室に入ってからには研究に限らず様々な面で熱意あるご指導を頂き、貴重な財産になりました。有難うございました。

平成8年卒 渡 貴司

4年生としてたった1年間しか先生の御指導を仰ぐことができなかったのは残念ですが、また我々を指導して頂ければと思います。有難う御座いました。

平成9年卒 安達 好彦

西脇先生に高張力ボルトに関してだけでなく物の考え方及び筋道をお教え頂きました。実験誤差に大変厳しくお考えになられていたのが印象的でした。どうも有り難うございました。

平成9年卒 岡坂 英一郎

先生にとって最後の学生になれたことを誇りと思うとともに責任を感じています。この責任を全うすることがこの1年先生から御教授頂いたお礼になると考え、一生懸命努力する所存であります。

平成9年卒 川田 延也

中間発表で先生から言葉遣いなどをよく注意されました。そのおかげで苦手だった発表が以前に比べてうまくできるようになりました。いろいろなことを教えて頂き有り難うございました。

平成9年卒 木下 喜敦

先生には、授業や研究、発表会等を通じて、「学問」だけでなく、人間としての大きさ、深さの意義を学ばせていただきました。誠にありがとうございました。

平成9年卒 杉山 忠弥

西脇威夫先生、御退職おめでとうございます。先生の御指導を承り、私自身も成長することができました。これから益々の御繁栄を御祈りしております。

平成9年卒 杉山 雅英

長い間おつかれ様でした。先生のご指導のおかげで、自分自身が大きな成長を遂げることができたと思います。

平成9年卒 森田 淳

在学中は大変お世話になりました。辛く厳しい研究室でありましたが、今、その経験が活かされていると早くも実感しています。西脇教授、お体に気をつけて頑張ってください。いつの日にか再会する時を楽しみにしております。

平成9年卒 吉成 大輔

学生に西脇先生のことをよく聞きますが、これほど学生に慕われていらっしゃる先生ははじめてです。今後もよりよい鋼構造研を築いていくためにご指導お願い致します。

鋼構造研究室 助手 白旗 弘実

◆西脇威夫先生定年御退職記念 CD-ROM 橋梁写真集

西脇威夫先生定年御退職記念事業会
記念出版物事業会

西脇先生が今年の3月に定年御退職されました。私達、西脇威夫先生定年御退職記念事業会では、その記念出版物として西脇先生が世界中で撮られた橋梁の写真約5000枚の中から600枚程度を選び CD-ROM 橋梁写真集を作成中であります。6月末に写真を300枚程度選抜し、その写真を画像データにスキャンする作業が終わりました。現在はその写真の仕訳作業に追われています。そこで、現段階ではその CD-ROM の詳細を説明することはできないので、全体的な画面設計についてのみ、簡単に示したいと思います。

● 画面設計

仕分け項目と並び順は以下とします。

- (1) 国別
- (2) 橋梁形式別 (吊り橋, 斜張橋, アーチ橋, ... etc)
- (3) 橋梁名称別 (アルファベット順)

(1) 国別

画面の流れを一例で示すと以下となります。

世界全図：模式的に表示された世界全図に対象となる国が色別に表示され、一つを選択後次画面へ。



国別地図：国別地図上に橋梁位置が表示され、一つを選択後次画面へ。



橋梁写真：数枚組の写真を表示。



拡大写真：数枚組の写真の内、1枚を拡大表示。

(2) 橋梁形式別

形式模式図：升目に切られたブロックに橋梁形式を模式的に表示し、一つを選択後次画面へ。



世界全図：世界全図上に指定された形式のみの橋梁位置が表示され、

一つを選択後次画面へ。



橋梁写真：数枚組の写真を表示。



拡大写真：数枚組の内、1枚を拡大表示。

(3) 橋梁名称別

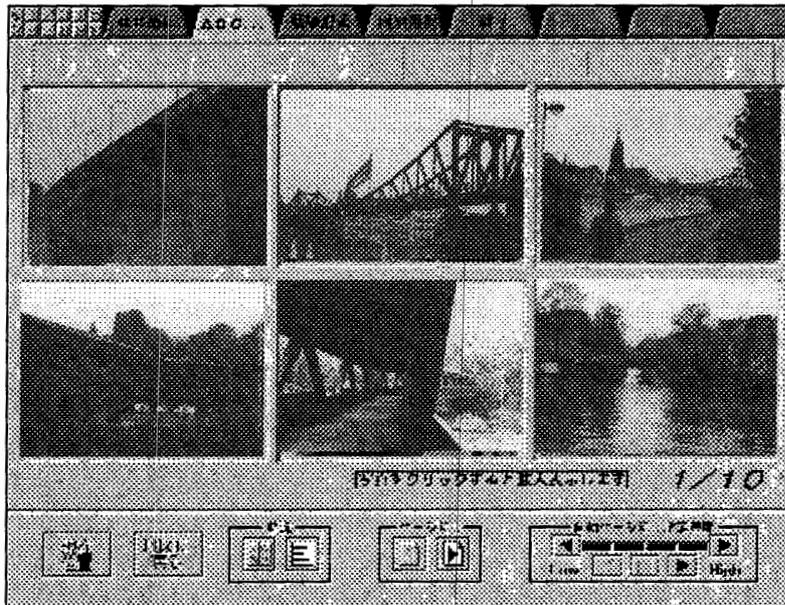
名称一覧：一覧表形式で、橋梁名称、国、橋梁形式、年代を1行に表示し、一つを選択後次画面へ。



橋梁写真：数枚組の写真を表示。



拡大写真：数枚組の内、1枚を拡大表示。



サンプル画像（7月7日現在）

- ・ディスプレイの解像度 800*600 dpi
- ・焼き付け枚数 1000枚

基本的に、MS-WINDOWS 対応とします。

Macintosh 版も希望がありましたら、枚数限定で製作が可能です。

完成は11月頃の予定。

◆会合報告◆

平成7年 武蔵橋友会総会・懇親会

渡 貴司

平成7年10月21日、新宿のホテルセンチュリーハイアットにて武蔵橋友会総会及び懇親会が行われました。会場には、63名の会員が集まり、卒業以来久ぶりに再会された方もおられたようで、つかの間の一時を級友と談笑される様子が伺えました。また、今回の武蔵橋友会総会及び懇親会には関東学院大学の倉西茂先生にもご参加いただきました。倉西茂先生には、総会の前に行われた武蔵橋友会主催の講演会で講演もしていただき、大変貴重なお話を聞くことができました。学生会員にとりましても、普段あまり話す機会の少ない先生方や先輩方とも歓談でき、とても有意義な時間を過ごすことができました。

また、当日は多くの方々からご寄付を頂き、誠にありがたく厚く御礼申し上げます。

◆鋼構造ニュース◆

● 助手として白旗さんが就任

平成9年3月をもって西脇先生が定年退職されました。そこで、本年度4月から新しく助手として東京工業大学出身の白旗弘実さんが就任されました。白旗さんは東京工業大学に在学中は疲労の分野でご活躍の三木先生の研究室に在籍し、非破壊検査に関する研究をされていました。現在は鋼構造研究室1階にて土木学会論文集に論文を投稿するべく日々研究活動に没頭しております。白旗さんは気が優しく、学生の質問または相談に事細かに応じて下さいます。また、昼食ならびに夕食は必ず研究室の学生と出かけるなど、いまではすっかり鋼構造研究室にとけ込んでいます。

以下白旗さんからの自己紹介文です。

(渡邊秀貴, 修士2年)

鋼構造研究室就任に向けてのあいさつ

白旗弘実

今年度から助手として武蔵工業大学に勤務しております白旗弘実と申します。土木工学科は武蔵工大の中でも伝統ある学科であるということを知ったのは最近であり、非常に身の引き締まる思いです。私のこの就職に関わって下さった武蔵工大の先生方にこの場をかりて深くお礼申し上げます。

私は昨年度までは東京工業大学博士後期課程土木工学専攻に在籍しておりました。私の専門は溶接継ぎ手部の超音波による非破壊評価です。近年、鋼橋建設の合理化に関して、主桁の現場溶接継ぎ手の適用、少数主桁化が多くなっているのは鋼構造研のだれもがご存じとは思いますが、現場で溶接するので品質が工場で行ったものより低下し、継ぎ手部内に溶接欠陥が発生しやすくなります。また、少数の主桁を用いるのでフランジの厚さが厚くなります。超音波は鋼中もよく伝わり、放射線にかわる非破壊評価法として適用が検討されています。溶接内部に含まれるブローホールなどは比較的検出できますが、割れなどは検出が難しいといわれています。その理由は面状の割れでは入射超音波が別の方向へ反射してしまうからです。

研究では実験、有限要素法による数値シミュレーションを行っております。パラメータを変えながら実験、シミュレーションを行い、どのような場合に欠陥からのエコーがとりやすいかを研究しています。

私の武蔵工業大学、ひいては学生の印象について述べさせていただきます。去年の9月、増田先生に4号館の研究室を見せていただきました。そのとき、部屋にいた学生のほほみなさんが私にあいさつしてくれました。私は「まだ採用されるかわからない人に対してあいさつしてくれるなんて。」と非常に感激したのを覚えています。いまでは、学生実験の手伝いも少々しております、学部生との交流もあるのですが、もう少し（増田先生に対して）反応があればいいのに、と思うことがあります。このことを他の人に話したことがあるのですが、「学部生はどこもそんなものじゃないか。」と言われ納得したことがあります。たしかに大学、もう少し正確に言えば工学部のおもしろさは研究室に入ってからの方がわかるものかもしれません。

武蔵工大は尾山台駅から比較的遠く、学校のまわりは住宅地、工場があったり、車のおりもそれほど多くなく、そういったところは東京の都市部にある大学とはすこし異なった印象を受けます。また、そばに多摩川が流れていますが、私も疲れると多摩川へ行ったりします。川を歩くのは私はとても好きです。

私は中学校では吹奏楽部でクラリネットを、高校では陸上部で中距離の選手をしていました。クラリネットはいまは吹けるかわかりませんし、高校では400m

を 57 秒で走った程度なのでたいしたことはありません。大学では準硬式野球部に所属していました。結局試合には出たことがなく、こちらもたいしたことはありません。現在、平日は研究室にいて、日曜日は午前中はずっと寝ていて昼頃洗濯する、という生活をおくっています。日曜日の午後は本屋街を歩くか、電気街を歩くのがただ一つの楽しみとなっております。また、テレビでマラソン、相撲を見るのが好きです。以上が私の趣味といったところです。

さきほども少しふれましたが、学生生活の最後ともなる研究室生活をいかに有意義に過ごすか、ということは非常に重要だと思います。私もこの新しい環境で学生といっしょにより研究室生活を送れるよう力を尽くしたいと考えております。試行錯誤もあり、橋友会の先輩方からはいろいろご指摘いただくとは思いますが、よろしくお願ひ申し上げます。



● 鋼構造研究室にチリからの留学生配属

平成8年4月、鋼構造研究室に初めての外国人留学生が配属されました。名前はHUGO B LEIVA CORTES さんです。私たちはウーゴさんと呼んでいます。ウーゴさんは国費留学生であり、その規定により日本語の習得のため武蔵工大に来る前は大阪外語大学に半年間在学していました。母国語はスペイン語ですが、私たちと会話するときは英語と日本語を半々に使います。研究テーマは斜張橋の自動設計に関する研究です。

(渡邊秀貴, 修士2年)

以下, Hugo さんからの自己紹介文です。



This picture was took the summer'94. After a hard work at Concepcion Town for the project about new Biobio bridge.

かんぱい しましょう。 Thank you very much

I want to begging this issued with my proper identification. Always with the disposition to establish a communication with Musashi students and others that have interest in travel and know about my country. I am Hugo B. Leiva Cortes. Through this media I give my greeting and thanks for this important opportunity.

The summer of 1994 seems to be the important starting point of my life as professional. During the participation as Chilean counterpart in the project carried out by JICA-MOP entitled: "Feasibility study about New Biobio bridge at Concepcion town".

My preliminary studies in relation to civil engineering were realized at

"Universidad de Chile". I am graduated as Civil engineer at 1991. After, I worked in the private company before ingress to Ministry of public works (MOP), Department of Bridges. The last work was decisive to continue studying at Japan the theme of long span bridges design.



This picture was took during the final ceremony of graduation the last February.

Actually, I am studying in Musashi under the category of "daigaku-in" in the program of master course, second year. My professor Mr. MASUDA Nobutoshi from the Steel structure laboratory has been important support to carry out this investigation.

Considering the actual development of Latin-American countries, specially Chile, my country, I think so that to know advanced technology and technical support is the adequate and required cultivate to growing up. Such important factors can be supplied through of this kind of study programs.

Japan has been at the past and the present time an important collaborator to promote with economical support and technique to poor countries can to leave behind low standards of lives.

● 鋼構造研究室のホームページの開設について

修士2年 河上 守 (平成8年卒)

アルス製作所 廣澤 薫 (平成9年卒)

学部4年 井上 雄城

1. はじめに

現在、インターネット全盛の時代であり、比較的自由に使用できるお金があり、コンピュータに対する抵抗感が少ない20代、30代の比率が高いと言われています。(Yahoo!JAPANより)特に、武蔵橋友会の会員の方々は理系出身者であり、会社においてパソコンやWSを道具として、仕事をしている方々も多いため、インターネットに対する基礎的な知識を備えられている方々も多いと思います。武蔵橋友会は、会員相互の親睦を図るとともに、会員の構造・橋梁技術者としての知識・技術の向上と母校の発展に寄与することを目的としております。しかし、現在の2年に1回の総会や橋友会誌の発刊では、会員相互の親睦は必ずしもスムーズに図れていないのが現状と思われまます。財政・労力的に現在の2年に1回の総会や橋友会誌の発刊を増やすことは、困難な状態であります。そこで、財政、労力的に負担が軽いと考えられるインターネットを利用して、会員の皆様に、武蔵橋友会に関する連絡事項、会員相互の連絡の場、現在の鋼構造研究室の様子などの情報の提供の場として、鋼構造研究室のホームページを開設いたしました。(原稿執筆時点平成9年6月25日(水)では、未開設であります。)そこで、この誌面をお借りして、鋼構造研究室のホームページの概要を説明させていただきます。

2. 鋼構造研究室のホームページについて

ここでは、鋼構造研究室のホームページについて簡単に説明します。図-1に鋼構造研究室のトップ画面を示します。この画面は、鋼構造研究室の顔となる画面であり、この画面の下にある(図-1には表示されていない)「研究室紹介」、「先生の紹介」、「武蔵橋友会」、「学生の紹介」を押すことによって、それぞれの画面に入ることができます。それぞれの内容を簡単に説明します。

「研究室紹介」

- ・鋼構造研究室の年間予定表
- ・鋼構造研究室の修士論文
卒業論文のテーマ一覧
- ・鋼構造研究室のコンピュータ環境
- ・最近の鋼構造研究室の話題

「先生の紹介」

- ・増田教授、白旗助手の自己紹介



図-1 鋼構造研究室のトップ画面

「武蔵橋友会」

- ・西脇先生御定年記念事業について
- ・総会・講演会のご案内
- ・OBのページ

「学生の紹介」

- ・学生のページ (各個人で作成)

3. 武蔵橋友会のホームページについて

ここでは、武蔵橋友会のホームページについて簡単に説明します。図-2に武蔵橋友会のトップ画面を示します。この画面は、武蔵橋友会の顔となる画面であり、この画面の下にある「西脇先生御定年退職記念事業について」、「総会・講演会」、「OBのページ」、「会則」、「会員名簿」を押すことによって、それぞれの画面に入ることができます。それぞれの内容を簡単に説明します。

「西脇先生御定年退職記念事業について」

- ・西脇先生の御定年退職記念パーティーのご案内
- ・西脇先生が撮られた写真集
- ・西脇先生の自己紹介

「総会・講演会」

- ・総会・講演会のご案内

「OBのページ」

- ・OBのページ

「会則」

- ・武蔵橋友会の会則

「会員名簿」

- ・会員の卒業年度・氏名・メールアドレス



図-2 武蔵橋友会のトップ画面

4. おわりに

インターネットに代表される双方向性のあるメディアは、一方的に情報を流すだけでは、情報の価値が半減してしまいます。情報は双方で共有し、意見を出しあってさらに付加価値のある情報にすることで、有効に利用していると言えます。この文章を読むだけでは、鋼構造研究室のホームページのイメージしかつかめいと思いますので、インターネットをすることができる環境の人は、是非、ご覧いただき、ご意見、ご感想をいただけると有り難いです。そして、会員の皆様からのご意見、ご感想をもとに今後の鋼構造研究室の一層の充実を図りたいと考えています。鋼構造研究室のホームページにアクセスするには、「武蔵工業大学のホームページ」、「土木工学科」、「研究室」、「鋼構造研究室」とアクセスをしていってください。(鋼構造研究室のWWWサーバは原稿執筆時点では未定であるため)

武蔵工業大学 URL <http://www.musashi-tech.ac.jp>

最後に、このインターネットの活用の企画は、武蔵橋友会誌 No.7 (平成7年10月出版) の42～49ページの企画の続編であることを記します。とても、いいこと尽くめのインターネットの活用ですが、原稿執筆時点ではまだ、鋼構造研究室のホームページは、立ち上がっていません。この原稿が皆様の目にはいる頃には、鋼構造研究室のホームページが立ち上がっているはずです。

◆修士論文一覧

平成6年度

- ・単純桁橋と連続桁橋における地震時の挙動に対する免震的一考察
大槻 保
- ・I型鉄桁橋の静的応答特性および解析精度に及ぼす力学的・数値解析的モデル化諸因子の影響
駒場 勝美
- ・局部荷重を受ける腹板の弾性座屈に関する研究
高橋 実
- ・高力ボルト引張接合—短締め形式—の挙動に及ぼす軸力の影響
前野 慎介

平成7年度

- ・順応型有限要素法における誤差評価と要素再分割に関する基礎的検討
岩下 宏
- ・プレートガーターパネルのフランジおよび補剛材の構造特性ならびに境界条件が腹板の弾性座屈係数に及ぼす影響について
岡村 悟
- ・薄板要素の初期応力マトリックスが座標表示に基づく幾何学的非線形解析の精度に及ぼす影響
菊池 孝雄
- ・両端部で境界条件が異なる薄肉円筒シェルの理論座屈解析に関する研究
尊鉢 丈祐

平成8年度

- ・高力ボルト引張接合—短締め形式—における2次元解析に導入した仮定の妥当性に関する一検討
小林 剛
- ・節点に回転自由度を有する四面体要素の定式化
薮島 洋伸

◆卒業論文一覧

平成6年度

- ・回転自由度を有する四面体要素に関する検討
佐野 淳一
- ・3次式による外挿とコード法を用いた薄肉立体構造の幾何学的非線形解析プログラムに関する検討
小泉 武宏 須藤 圭司
- ・高力ボルト引張接合・短締め形式における継手の挙動と導入軸力の関係に関する実験的検討
竹下 展広 菅野 亮一
- ・免震装置を付加した橋脚の動的応答解析について
小林 剛 広岡 洋章

- ・補剛板に対して全長に配置されていない補剛材の補剛効果に関する数値的検討
三浦 康治 有馬 敬幸
- ・2枚の薄板で構成される構造解析モデルの入力データ作成時における労力低減の一検討
木藤 宅弥 渋谷 崇人
- ・側圧を受ける上端自由下端単純支持された薄肉円筒シェルの座屈固有値解析
斉藤 隆信
- ・記憶容量低減のための節点番号付け法プログラムの作成
三枝 弘平
- ・変位誤差による薄板要素の特性
薮島 洋伸
- ・順応型有限要素法に関する検討
野 均 三瓶 一俊

平成7年度

- ・順応型有限要素法の要素分割に関する基礎的検討
江藤 哲也
- ・座標表示に基づく薄肉立体構造の幾何学的非線形解析のための初期応力マトリックスの作成と有効性の検討
呉本 秋治 渡 貴司
- ・面内回転自由度を有する三角形薄肉要素の開発とその特性
松尾 修一 山田 洋志
- ・記憶容量低減のための節点番号付け法プログラムの修正
渡口 雅人
- ・高力ボルト引張接合短縮め形式における継手面の変位に関する解析的検討
安里 昌雄 市原 徹也
- ・高力ボルト引張接合・短縮め形式における初期導入軸力に関する実験的検討
田中 康隆 橋本 幸雄 山川 雅敏
- ・振動実験装置の製作と計測機器の構築
貞池 泰寿
- ・免震装置による橋脚の動的応答解析
平井 陽一郎
- ・クラッド鋼の有限要素法解析の現状と構造解析汎用コードによる層状板解析の基礎的検討
日吉 忠臣
- ・両端部で境界条件が異なる側圧を受ける薄肉円筒シェルの座屈解析
保坂 剛男 河上 守
- ・プレートガーダーパネルの座屈モードとモデル化に関する検討
井村 貴典 渡邊 秀貴

平成8年度

- ・鋼材の応力～ひずみ関係に関する基礎的検討
刈山 蔵 杉山 雅英

- ・ステンレスクラッド鋼の力学特性についての基礎的検討 川田 延也
- ・稜線上で周面の変位の一致を考慮した回転自由度を有する四面体要素の開発 木下 喜敦
- ・記憶容量低減のための節点番号付け法プログラムの再修正 杉山 忠弥
- ・プレートガーダーパネルにおける補剛材のねじり剛性が腹板の弾性座屈荷重に及ぼす影響 増田 裕之
- ・送り出し架設時におけるプレートガーダーパネルの弾性座屈に関する研究 吉成 大輔
- ・門型ラーメン橋脚を有する鋼製高架橋の地震時応答特性に及ぼす免震支承取り付け位置の影響 安達 好彦
- ・学生実験としての強制振動実験装置を用いた振動計測 廣澤 薫 榊原 麻美也
- ・支承剛性が橋脚の応答に及ぼす影響 小野 貴弘 大庭 祐樹
- ・高力ボルト引張接合・短締め形式の継手の挙動と導入軸力に関する実験的検討 岡坂 英一郎 鈴木 希世史 森田 淳
- ・高力ボルト引張接合・短締め形式の継手挙動に関する一考察 井上 淳市 墨 正則

● 渡貴司君が土木学会学術年次講演会で優秀講演者賞受賞

平成8年度土木学会学術年次講演会で渡貴司君が優秀講演者賞を受賞しました。平成7年度より、論文・講演内容の向上や全国大会の活性化などを目的として、土木学会全国大会で優れた講演を行った若手研究者、技術者を表彰する「土木学会全国大会優秀講演表彰」の制度が設けられました。当研究室在学中の受賞者として、渡貴司君が第1号となりました。この賞は学生でも十分にねらえる賞でありますので、今後研究室内の学部生ならびに院生が続々と受賞できるようにがんばります。以下に受賞論文の概要を示します。（渡邊秀貴，修士2年）

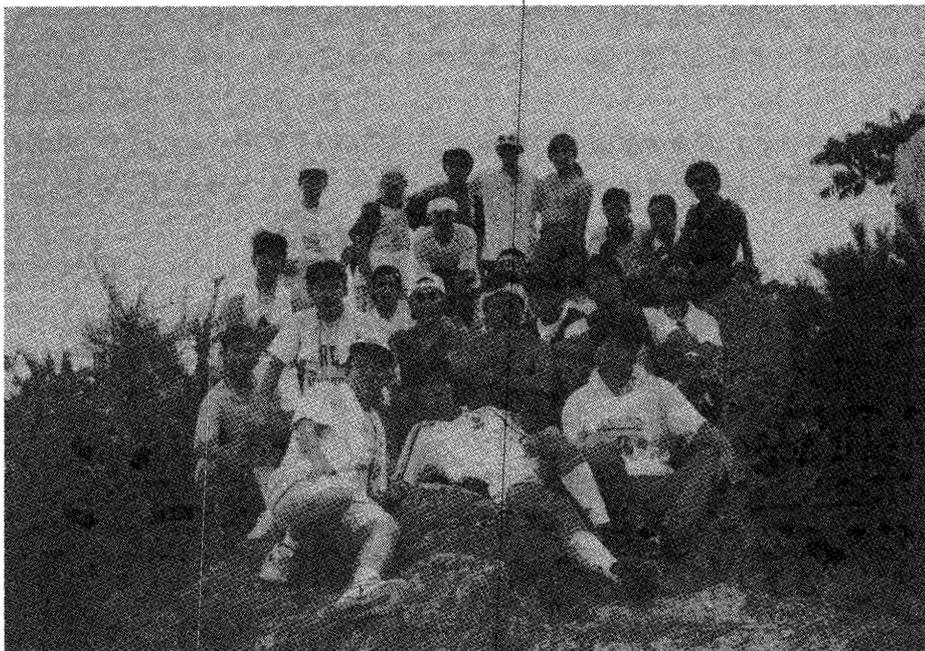
概要：有限要素法による薄肉立体構造の幾何学的非線形解析の精度効率の向上を目的として検討を行った。個々の要素には線形要素を用い、要素と共に移動する座標系と全体座標系との間の座標変換を忠実に表現することによって剛体的な変位・回転を取り除き、構造全体での幾何学的非線形性を考慮する解法に対して、本研究では個々の要素においても初期応力行列を導入し、幾何学的非線形性を考慮した。圧縮板の大変位解析の問題を取り上げ、初期応力行列導入前後の誤差を計算して、精度と計算時間に及ぼす影響を検討し、初期応力行列導入により相対的に少ない要素分割と計算時間で同程度の精度の解を得ることができることを明らかにした。

◆ 夏の江田島合宿

川田延也

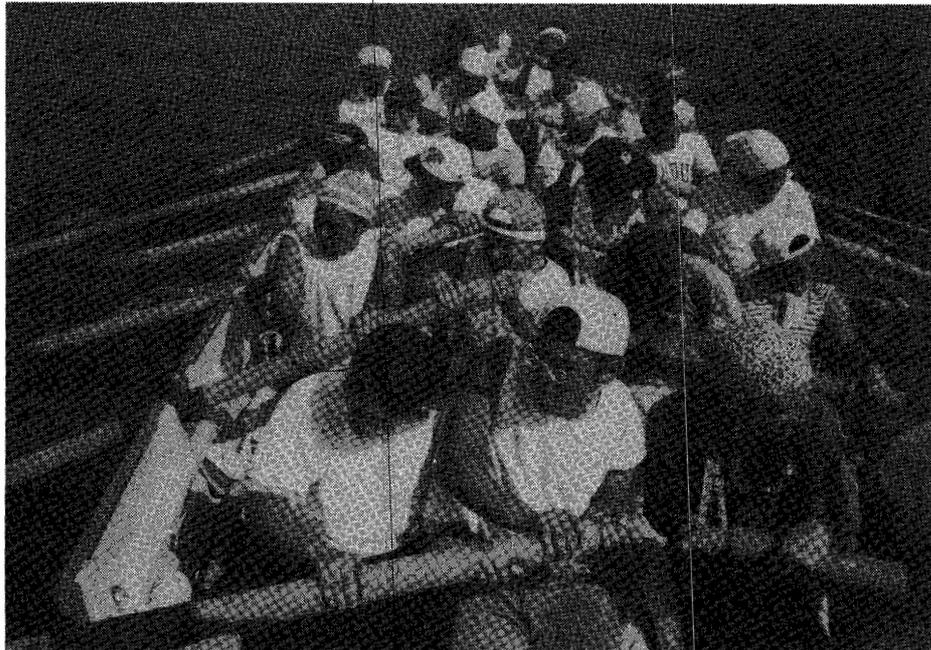
本研究室恒例の夏合宿が、昨年（8月21日～8月28日）も例年通り国立江田島青年の家（広島県）で行われました。今回の合宿は、関西方面での現場見学会を兼ねて1週間の日程で行われ、青年の家では、ゼミ形式による英語の文献読解や、恒例行事である古鷹山登山、カッター訓練、教育参考館見学等を行いました。また、西脇先生のご参加により、特にゼミ、カッター訓練、教育参考館見学などではより一層充実した研修を行うことができました。

青年の家では、一昨年から全面改築工事を行っており昨年でほぼ完成しました。これにより、青年の家の生活環境は以前の面影も無くがらりと変わってしまい、特に宿舎は、全館鍵付きの個室、ベッド、しかも冷暖房付き（ただし、夜中の1時まで）といたれにつくせりの環境が整い、以前からは想像もつかないほど快適に（？）過ごすことができました。しかし、青年の家での生活そのものは以前と変わりなく、青年の家の生活信条である『規律正しく 仲よく 真剣に』を念頭に、普段不規則な生活を送っている我々にとって過酷なものでした。朝起きるとまず、ベッドと身の回りの整頓をし、続いて鋼構造研究室独自のメニューである朝のマラソンでは、普段走ったことなどない学生が朝の眠さと時間（朝の集いの前なので時間がない）と戦いながら走り、その後、朝食、清掃と続き、ゼミでは慣れない英語で悪戦苦闘したり、ソフトボールやサイクリングをしたりと休む暇もなく時間が過ぎていきます。こうして、江田島での規則正しい生活は、楽しい思い出とともに過ぎていきます。



今回の合宿で一番印象に残ったことは、やはり、西脇先生と御一緒にカッター研修を行ったことです。西脇先生に「5番カイがあまい！」などと怒鳴なれながらも全員一丸となってカイを漕いだことは、きつく辛いものでありましたが（西脇先生本人は、昔を思い出したらしく楽しそうでしたが・・・）、今考えるととても楽しい思い出になりました。このカッター研修で研究室の絆が一段と深まったことは言うまでもありません。

江田島に着く直前まで、おそらく全員が抱いていたであろう不安は、江田島で生活するうちにだんだん消え、江田島を発つ日には寂しさも抱くような感じさえました。この合宿を通じて室員の誰もが貴重な経験としたと思うことでしょう。



◆ 夏の現場見学会

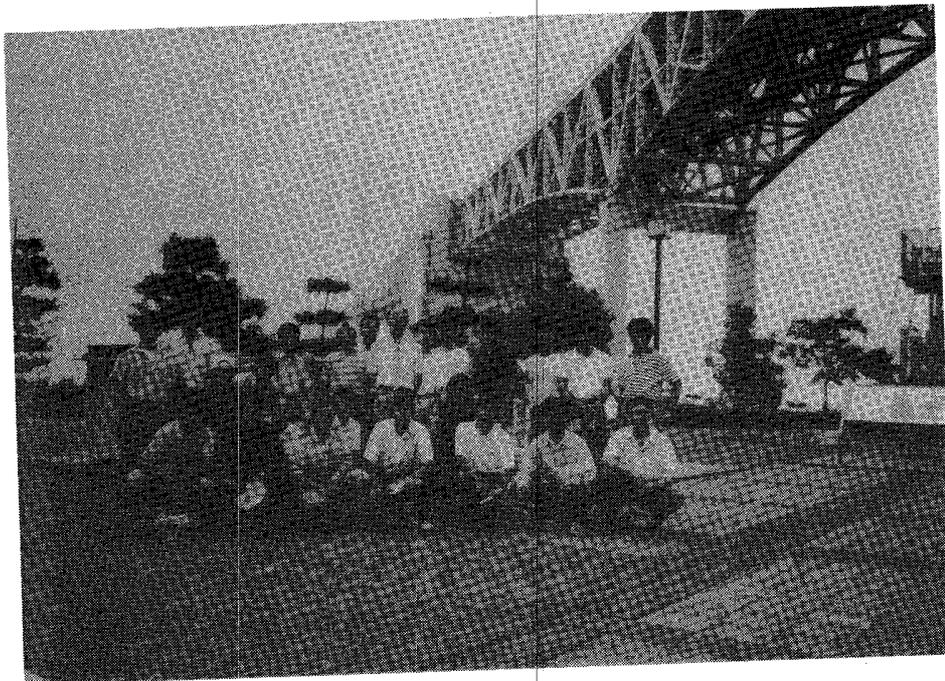
川田延也

昨年も例年と同様に、夏合宿期間中の現場見学会をOBの方々のご協力の下、無事行うことができました。これから社会にでる我々学生にとって、実際の現場を肌で感じることでできる貴重な場であり、また様々な現場を見学できる絶好の機会になりました。特に、昨年度の見学会では、平成7年1月に起きた阪神・淡路大震災の復興現場を見学し、その復興の早さと地元住民の熱意にただ驚くばかりでした。このような現状を目の当たりにし、これから土木技術者として社会に出ようとする我々にとって、少なからず土木技術者としての一端をかいま見る

ことができたと思います。

最後に、このような貴重な経験をさせていただきました皆様に研究室一同、深く御礼申し上げます。 昨年は以下の現場を見学させていただきました。

1996年
多々羅・来島大橋架橋現場
瀬戸大橋
明石海峡大橋架橋現場
震災復興現場（神戸）



なお、夏の現場見学会の他にも、各方面の方々のご協力により多数の現場見学会が催されました。ご協力を頂きました方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。

◆ 富士山登頂達成！

安達 好彦

1996年7月26日、増田先生と我々鋼構造研究室の学生20名は、かねてからの(増田先生の?)念願であった、富士山登頂を達成したのでした。

小林剛さん(当時修士2年)が陣頭指揮を取り、何回も富士登山の経験がおり西脇先生から色々な御助言を頂き、さらに登山に適した日はいつなのかを気象庁に行きまで調べる熱の入れよう。そして当日、出発の日を迎えた。もの見事に快晴だった。そして朝9時にチャーターしたマイクロバスで環八から東名高速を経て一路富士山新五合目(富士宮口)へ。行く前までは「行きたくねー!」と書いていた学生一同は、腹を括っていたのか開き直ったのは定かではないが、「登山はやっぱりつなぎだろ!」と数名が研究室からつなぎを来てバスに乗り込んだ。そのころには、もうやる気万々だった。

そして運命(?)の登山が始まった。その直前にトラブル発生。実は私は、研究室から8mmビデオカメラを持ってきて、リュックに積んでいました。ねらいは、「登山する前と登山後のみんなの表情をとりたい!」というところにありました。しかし・・・前日しっかりと充電したはずのバッテリーが、全く使用していないのになくなっていてのです!どうしようもなく私は、無駄な荷物を運んで登山するはめになってしまいました(邪魔だったな～)。

ようやく登山開始。登山に出発する前に記念撮影。まだみんな元気である。そして当時室長だった私が先頭を切って登山に入る。途中休みながらも比較的順調に登っていった。何人かの脱落者が出るのではないかと心配していたが、とりあえず順調だ・・・と思ったのも束の間、ふっと振り返ってみると、当時修士1年のM.K.さんが見えない・・・?仕方なくそこで待つこと約10分、ようやく見えてきた。かなりつらそうだ。一同思う。「あの人バトミントン部だったよね?」「サイクリングもやっているはずだよ」そうこうしているうちにみんなと合流。全員が「さあ、行くか!」と気合いを入れ直したところだが、M.K.さんは休みなし。そんなことが続き、その日の宿泊場所である八号目の山小屋に全員が無事到着した。およそ6時間、登り続けた。

そして、夕食。山小屋の夕食は早いし、少ない。プラスチックの器にカレーライス、それだけである。これでは物足りない全員が思っていたところに増田先生が一言。「ビールでも飲もうか。」素晴らしい!一同感激して、ビールを味わって飲んだ。しかし缶ビール一本だけであったが、地上に比べて(?)酔いが回るのが早いことには、食事が終わるまで誰一人として気付かなかった。

そして山小屋の中での就寝。いつもは家のベッドで大の字になったり寝返りを打

ったりして寝ている私であったが、寝るスペースの狭さに驚かされた。ほとんど隣の人と抱き合っような感覚といった方がおわかりいただけるでしょう。次の日はご来光を拝みに行くので、午前2時くらいに出発の予定なので、午後8時くらいには就寝に入ってしまう。「小学生でもこんな時間には寝ないぞ」と思いつつ、寝ようとする。しかし、足元にいるおやじのいびきがすごいことすごいこと。おかげで私は全くとっていいほど眠れずに、朝を迎えた。

出発前の午前1時半、私は外に出てみた。周りは真っ暗闇だったがふと上を見上げてみると、そこには天然のプラネタリウムが広がっていた。そこらにあるものはわけがちがった。「す、すごい！すごすぎる！！！」私は思わずそこに立ち尽くしてしまったのであった。

そうしている間に、出発のときを迎えた。前日と同じように休みながら登っていた。あのM.K.さんもちゃんとついてきている（というか、M.K.さんを先頭にしたのでした）。その休みの間に、天文研究会に所属していたK.H.君（当時学部4年）が、星についての講義をして、終始和んだ雰囲気ですんでいった。そしてもうすぐで頂上だ、と思った瞬間、一番乗りをしたかった私は、そこから最後の力を振り絞って猛ダッシュ！・・・ところが後から来た人に抜かれてしまい、結局6着（情けない・・・）。そして影富士が見えるところまで登ったところで、眩しくなってきた。御来光だ！一同、感激して記念撮影。その後、測候所まで行った人が多かったが、私はその日一睡もしていなかったのも、その場で仮眠（西脇先生には、もったいないことをたなあと言われた）。

そして下山。下山のメインは砂走り。一同、最初は一気に駆け下りる。その後だんだん疲れてきて、ペースダウン。はるか遠くにみえるゴール地点、御殿場口の駐車場を常に見ながらの下山。途中幾度となく振り返り、「よくここまでやったなー」と感心しながら下りていく。そして9時過ぎ、全身砂塗れになりながら全員が無事下山。登るのに6時間以上もかかったのに、下りは3時間弱。登りは辛そうだったM.K.さん、帰りはピンピン。何なんだ？という思いを抱きつつ、待っていているバスのもとへ。その後増田先生は、会議があるということなので、そのまま御殿場駅から「あさぎり」で一足先に東京に帰られた（先生すごい、と皆が思った）。

その後は私たち学生だけとなってしまったが、箱根のとある超(?)高級ホテルへ。そこで露天風呂に入って、食事をした。その露天風呂が富士山が見える場所で、「よく登ったよなー、あんなところまで」と思いながら、全員が露天風呂ではしゃいだ。でも、増田先生と最後まで御一緒できなかったのが、残念であった。

そして食事をした後帰宅。いろいろありましたが、とても研究室の学生の結束が固まったという感じがしました。例年ですと、江田島の合宿で結束が固まるそうですが、この年はその前に固まってしまったような気がしました。私自身、とてもい

い経験になりました。はじめは、「2度と登るもんか！」なんて思っていたんですが、終わってみると「もう1回くらい登ってもいいかな？」という気になってしまいました（まずい、こう書くと来年行こう！っていうことにならないかなあ？）。

最後に、遅れ馳せながら、修論でお忙しい中何もかも手配してくれた小林さんに、書面上を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



◆お知らせ◆

会費の納入とご寄付をお願いいたします！

平成元年の武蔵橋友会誌にて武蔵橋友会会則が承認され、平成元年七月一日より施行されております。この規約に基づき、会費を納入して頂きたくお願い申し上げます。会費の主な使用目的は、会誌の発行費、講演会の講演料、通信費です。なお、会誌をさらに充実させるためや、講演会の講演者を広く全国よりお招きし会の活動をさらに活発にするためにも、ご寄付をして頂けると幸いです。

会費：2000円（2年分）

寄付：随時受付

（口座番号：00180-0-713554 をお願いいたします。）

会誌を発行しています！

武蔵橋友会会則の方針に基づき、会誌を2年に一度のペースで発刊しております。会誌に対するご希望・新企画・ニュース等がございましたら編集担当者までお知らせください。会誌を発行するにあたって会員だより等の原稿も募集しております。原稿と併せて写真やイラストをお送りいただければさらに楽しい会誌ができることと思います。原稿は会誌発行の年に限らず随時受け付けております。また、編集担当者から執筆をお願いすることがあるかと存じますがその折には何卒宜しくお願い申し上げます。

講演会を開催しております！

武蔵橋友会の事業の一つとして、年間二回の講演会を開催しています。講演者の推薦とそのお世話をさせていただける場合には、講演会開催係までご連絡ください。なお、講演題目、講演者氏名、日時、場所、参加費用等につきましては、その都度、お知らせいたします。お誘い合わせの上ふるってご参加下されば幸いです。

前項の件に関するお問い合わせは、下記の所をお願いします。

〒158 世田谷区玉堤1-28-1

武蔵工業大学 土木工学科 鋼構造研究室内

武蔵橋友会事務局

TEL 03-3787-3985 内線3264

FAX 03-5707-2224

◆バックナンバーのお知らせ◆



創刊号 1989年7月

- ・30周年を迎えて (西脇威夫)
- ・武蔵工大の10年 (増田陳紀)
- ・北欧の旅 (西脇威夫)
- ・歴代卒業論文一覧 ほか



第2号 1991年6月

- ・ヨーロッパの橋を見る (西脇威夫)
- ・中国の旅 (増田陳紀)
- ・会員だより
- ・歴代修士論文題目・要旨一覧ほか



第3号 1993年10月

- ・エレザベートとユーロコード (西脇威夫)
- ・会員だより (神谷義介/武部陽/皆川勝/黒田充紀)
- ・鋼構造研究室 博士・修士論文・要旨一覧 卒業論文一覧 ほか



第4号 1995年10月

- ・西脇威夫先生 ヨーロッパ国際会議旅行記
- ・阪神大震災被災後2週間目の現場を歩いて (増田陳紀)
- ・会員だより ほか

残部は残りわずかです。ご希望の方は送料500円を添えてお申し込みください。

武蔵橋友会会則の変更案

西脇先生がご退職されたのを期に、名誉会長職の設置、代表幹事制度の採用を骨子とする会則の変更案、並びに、西脇先生の名誉会長へのご就任と、増田先生の新会長就任をはじめとする役員の変更案が、本年度の総会に提案されます。この案が承認されますと、各卒業年次ごと1名ずつ委嘱される幹事の補佐のもと、数名の代表幹事が会務を実行することになります。卒業生の方々の会への積極的なご協力を期待しております。具体的な内容は以下の通りです。

武蔵橋友会会則（案）

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、武蔵橋友会と称する。

(目的)

第2条 本会は、会員相互の親睦を図るとともに、会員の構造・橋梁技術者としての知識・技術の向上と母校の発展に寄与することを目的とする。

(会員)

第3条 本会は、正会員、学生会員、賛助会員をもって構成する。

イ) 正会員は、武蔵工業大学工学部土木工学科鋼構造研究室（以下鋼構造研究室と称する）の現・旧教員および同研究室卒業生とする。

ロ) 学生会員は、鋼構造研究室に所属する工学部学生とする。

ハ) 賛助会員は、この会の目的に賛同し、正会員によって推薦され役員会で承認された者とする。

(事業)

第4条 本会は第2条の目的を達成するために必要な会合を開き、または事業を行う。

(支部)

第5条 本会は、役員会の議決を経て、必要に応じて支部を置くことができる。

第2章 組織

(役員)

第6条 本会に下記の役員を置く。

名誉会長一名 会長一名 副会長一名 顧問若干名

幹事長一名 代表幹事若干名（幹事兼務） 幹事（各卒業年次原則一名）

役員会は、幹事を除く役員で構成する。

幹事会は、幹事長、代表幹事および幹事で構成する。